

「祭」といふ文字は、上部は月と手で、下部は示で神事の義。手に肉を持って供献するの會意文字で、「春秋」には、牲なくして祭るを「薦」といふ、牲を加ふるを祭といふとありまして、牛や羊などをお供へ物にするのが祭であるといふのです。

「祀」は、示をもととし、巳を音とす形聲文字で、祭つて巳むなきなりと、申してありますから、誠心誠意お祭りをする事です。又た「祠」も亦マツリと訓んでゐますが、これは春の祭の事で、品物少く、文辭多きなりとあります。之に對して、秋祭を「嘗」といふのです。

こういふお祭りといふものが、どういふ経路を取つて行はるゝようになったかと申すと、それは天人一體の状態から、人間の集團本位の時代に入ったためです。支那で天と人との分離は堯舜以前の顛頊氏の時代で、小昊氏の時代には、民神雜糅して衆くの物を、一つ一つ名のつけようがないといふので、南正重に命じて天を司らせて神に屬し、北正黎に命じて地を司らせて地に屬し、地の天道を絶つといふことが、史記の五帝紀に載つて居りますから、茲に祭と政とが分離したのです。

古代の社會では、信仰は其の生活の最も重要な部分で、人と人との結合の唯一の紐帯であつたのですから、書經にも、堯舜三代の帝王は皆祭祀を敬んだとあります。周の時代には、信仰や宗

教的儀式を統一して、それに依て先づ精神的統一國家を建設しようといふ企てから、郊社の禮、諦嘗の義といふものが起りました。

「郊社の禮」とは、郊は野外に祭壇を築いて天を祭り。社は方澤を設けて地を祭る事で、共に天子の親祭でありました。「諦嘗の義」とは、諦は天子の先祖の自ら出る所を大廟に追祭して、始祖を以て之に配食し。嘗は秋祭りで、新穀を社即ち地の神に献する祭で、共に天子の親祭でありました。

この祭祀には犠牲、玉、帛、圭、璧、穀物、菜等を供へました。一口に犠牲と申しますが、犠牲とは別物で、犠とは屠殺した白馬、白猪、白鶏でこれを三犠と申し。牲とは生きたまゝの牛、羊、豕、魚、麋でこれを五牲と申しました。これ等は野生のものは用ゐぬことになつて居りました。帛は玄、纁、黄三色の絹布であります。こういふ供物を盛る祭器には鼎、俎(肉を盛る卓)豆(菜を盛る木の高杯)、籩(肉料理を盛る竹の高杯)等があり。天に屬する神を祭る時には、此等の供物を焼き。地に屬する神を祭る場合には、供物を水に沈めるか、埋めるかしました。

この祭祀を掌る役を春官と呼び、その長官を大宗伯と申しました。祭祀には音楽を奏し歌舞をなしたのであります。この歌舞音楽だけは、周の滅亡の際箕子が之を携へて朝鮮に移住しました

ので、爾來相傳へて現在李王家に保存されて居ります。私も大正十二年の夏、李王職雅樂部で、周時代の祭服を着けてなされる歌舞音楽を拜觀しましたが、この音楽は七十二種の樂器（李王家に傳はつて居るものは五十餘種）から成る、大オーガストラで磬（大理石の薄板）、鼓（木彫の虎）など他には見られぬ樂器もあります。又たその祭服は廣袖のもので、それに石帯をつけ、冠を載き笏を持つあたり、一見して日本の祭式の原型であることが首肯されます。

こういう風に、帝王の祭祀は實に整つたものでありましたが、民間の祭祀に就ては、孔子の孫の子思が書いた「中庸」のうちに、春と秋とには、先祖の廟を修理掃除して、祭器を陳べ、先祖の遣した衣服をかけて、其の季節の食物を供へ。子孫一同長幼親疎遠近の秩序を立て、廟内に會合し。其の父母在世の時の地位身分に相應した禮を行ひ、樂を奏し、其の尊親した人を敬愛し所謂死者に事ふること、生者に事ふるが如く、亡き人に事ふること、現存する人に事ふるが如く、することが、最も孝行で、そうすれば必ず其の誠が通じて、家は安泰に繁昌すると申して居ります。（つまり、祭といつても各家庭のその時代の日常生活様式そのまゝでよいといふのです）

これが儒者に依て、東洋道德の極致と絶讃される、所謂敬神崇祖の本義であります。それから支那では、王侯は國家統一の方便として、天神地祇を祭り。庶民は家内安全、子孫繁榮の目的

を以て、先祖の亡魂に事ふるといふことになりまして、茲に百鬼横行の社會が、出現することになつたのであります。

老子は「人ノ子タル者ハ、已アリト爲ルコトナカレ。人ノ臣タル者ハ、已アリト爲ルコトナカレ」と孔子に教へました。日本の古武士は「ただ身にもてる眞心を君と親とに盡すまで」と歌ひ。西郷南洲は「若シ天運ヲ開ク無クモ唯ダ誠ヲ推サン」と申しました。何等應報を期待せず、唯、ただ誠を盡すのが、眞の敬神崇祖で、祭祀の本義はこゝにあるのです。

八、招魂と齋戒

「招魂」といふことは、支那では上古以來、今尙ほ盛に行はれてゐる祭です。それは魂が體内に送り込まれてゐる間は、人は生き居るが、魂が體からぬけ出ると人は死ぬ。そのぬけ出た魂は或期間は、家の周圍にさまよつて居るから、それが冥府に行たり、他の體に送り込まれる前ならば喚び戻せるといふ信仰から來たものであります。魂を招く祭は招呼儀ともいはれ、禮記には復と申して、人が死んだときに、家族の者が死者の衣服を持つて、家の屋根に上り、之を上中下の三方に振りまわして、聲を長く引いて死者の名を呼んで、「ア、歸レ」と叫ぶのであります。こ

れは周の時代から引續き行はれて來たため、時折り學者などが、その不合理を論議して、政府から禁令が出た事が屢々ありますが、親が死んだ場合に子がこれをしない時は、不孝の譏りを免れず子が死んだ時に親がこれをしないのは、不仁だと他人に思はれるといふ處から、中々やみませぬ。

招魂の方法は、時代と地方とに依て、多少違つて居りますが、何れの場合でも、死者の着物を持つて、その名を叫ぶこと丈は、共通の要件であります。尙ほ魂の體外脱出といふことは、病氣で死んだ場合の外、河海に溺れた時、睡眠中、病氣中、子供が嚇かされたりした場合などにも起るものと信ぜられ、潮魂、收魂、叫魂など、それぞれ異つた方法が行はれて居ります。

前にも申しましたように、後漢の時代（日本の奈良朝時代）に教團組織を完成した道教が、發展するにつれ色々な祭儀が出來ました。そのうち特に日本神道に重大影響を及ぼして居るものは、齋戒と、符籙（マジナヒ）及び科教（經文を口に誦へること）であります。齋戒とは、普通には神を祭る準備行爲として、心身のけがれを祓禳することと、考へられて居りますが、それ自らが一つの祭でもあるのです。この齋戒に、極道と濟度の二つあります。極道齋といふのは、莊子がいつた心齋坐忘の法で、齋は物忌みの義であります。此場合には、香に腥物や酒を斷つばかり

でなく、節食をして極端になると斷食をします。その上心の汚れは物慾から起るといふので、精神的の斷慾をするため、靜坐して目に外物を見ず耳に物音を聞かず、心の耳目で見聞するようになります。茲に心が虚になつて、物慾に汚がされぬようになるのが、即ち心齋であります。

この心齋が出來れば、智の働きがやみ、全く自身の身體を忘れ果て、天地と同體に歸するのであります。之を座忘と申し、それは心齋の結果であります。

次に濟度といふのは、佛教でいふ濟度とは意義を異にしたもので、七種の濟度があります。其の一は、洞神齋で仙を求め國を保つの法であり、其の二は自然齋で眞を學び身を修むるの道であり、其の三は上清齋で聖に入り虚に上るの法であり、其の四は指教齋で病を救ひ災を禳ふの急と申し、其の五は塗炭齋で過を悔ひ命を請ふの要といひ、其の六は明眞齋で幽夜即ち地獄から救はるゝ時、其の七は三元齋で天地水の三官に謝罪することであり、其の八は、一日一夜、三日三夜、七日七夜の三種の期間があります。

佛教の禪宗とする坐禪の法は支那の智者大師が、この極道齋を學んでそれを取入れたものでありといはれ、又た、日本の所謂神道は殆んど支那の道教が日本に歸化したものですから、其の行事も亦大部分道教のもので、或教派でいふ鎮魂歸神などと呼ぶ行事は、極道濟度の燒さ直しに過

ぎませぬ。

九、近代支那の祭祀

清朝以後、近代の支那で行はれて居る祭典は、私共が學校で讀んだ所謂漢籍に載つて居るものとは、大分相違致して居ります。ですから一般日本人が所謂漢籍と稱する、唐宋以前の書物を通じて見たのでは、如何に保守的な支那と雖も、到底判るものではありません。

天壇、地壇に於ける天神地祇の祭は、清朝の滅亡を最後として、跡を絶ちました。

釋奠即ち孔子祭は、毎年春秋の仲月上丁の日に、官吏とか讀書人が行つて來たもので、日本人が想像するが如き、一般的の祭禮ではありません。それも國民政府になつて、蔣介石は儒教を以て、現在支那の國體と相容れざるものとして、孔子廟を破壊し祭典を禁止しました。

支那では、祭祀の場所として、寺、廟、觀、壇、堂、宮、祠、又は寺廟、宮廟などと稱するものがあります。寺や堂は佛教に屬し、觀や宮は道教に屬するものと思ふと大間違で、近代では混淆して更に差別はありません。此等の祭祀の場所で、佛僧や道士に依て行はれる、一般的の祭儀（支那では賽會ツァイカイと申します）は次のようなものであります。

祈 福 毎年舊曆正月十五日に之を行ひ、主として、天地水の三官大帝に、來るべき一年間の幸福を祈請するのであります。

謝平安 毎年舊曆八月以降に行はれるもので、正月十五日の祈福に對し、神恩感謝のために行ふ、降福の半期決算報告とでもいふべきものであります。

神 誕 支那人は其の信仰する神佛の、誕生日といふものをきめて居りまして、毎年一定日又は其の神誕の月中にお祭りをします。

中元祭 即ち盂蘭盆會で、毎年七月寺廟に於て佛僧は勿論道士も亦之を行ひます。

做 醮 大祭で、其の祭日は一定せず、年例的のものと、廟宇の新築落成、神佛像の開眼、水難、火難、凶荒、悪疫流行の場合などに行ふ、臨時的のものとがありまして、それに依て、建醮、祈安醮、慶安、福醮、完醮などと呼ばれて居ります。一たいこの「醮」とは酉をもとし焦を音とする形聲文字で、酉は酒の古字、焦は爵と同字で「サカヅキ」の義。そこで醮は醮と同じく、盃のやりとりをしない酒宴のことで、元來嫁とり元服のイハイマツリであつたのが、後世一般に祭禮をいふことになつたのです。

其他各地方特有のものがありますが、此等の祭儀には、神佛像の前に卓を据え、五牲（本來は

生きた家畜なのですが、近代では屠つたものをも牲と申して居ります、茶碗（即ち料理したもの）、菓子、菜類、酒、餅、金紙等を供へ、又た香爐を置きます。

その祭式の順序は（一）奏樂。（二）主祭三跪九叩の禮（跪とは膝を地につけることで、これが三度。叩とは膝を折つて頭を地につけることで、これが九度です。これが古來からの支那の最敬禮です）。（三）献饌（酒饌を三回献上）。（四）祝祭文朗讀。（五）燒金（供へた金紙を焼く。これは日本人には諒解の行かぬ事と思ひますから、別に説明致します）。（六）焚祝文（祝祭の辭を神佛に達するため、祝祭文を燃やす）。（七）主祭三跪九叩の禮。（八）撤饌。といふことになつて居りまして、式後供物を用ゐて参列者が宴會を致します。

燒金の由來とその種類

支那の古代の祭儀を載せた、禮記の春官大宗伯に天神の類を祭るには柴を繙く、とありまして、これは天は高くて昇れぬから、天に物を供へるには、煙にして差上げなければ届かぬといふ信仰から起つた事であります。それが紙の製造が發明されてから（紙は後漢の和帝の元興元年に蔡倫といふ人が發明したものです、西暦一〇五年）紙を以て柴に代ゆることになつたとい

ふことです。柴の代用ですから、最初は天神を祭る時に限られてゐたのですが、其の後、地に屬する祭にも、死者の場合、墓參のときにも使用されるようになって、金紙、銀紙の別が生じ、又たその紙面に刷られる圖様文字等によつて、色々な名稱があります。

金紙の原料は、竹紙を原則として、これに錫箔を塗つたものが所謂銀紙で、この銀紙の上に更に槐樹の花と明礬と煉洵（黄色の染料）とを混ぜて煮詰めたものを、刷毛引きしたのが、所謂金紙であります。金、銀紙共その用途に従つて、錢型、神像又は文字等を木板刷にします。

近代では、關帝、城隍爺、天后、觀音、祖師などの祭には、金紙を焚き、祖先、無縁佛、雜鬼等の祭りには、銀紙を焼きます。この金銀紙は日本のお賽錢と燒香とを兼ねた、祭祀の必要物ですから、其の消費は實に驚くべき數量に達するのであります。この燒金に就ての俗間の解釋は、お祭りの時に焚くのは、神佛に年貢を納めるのであつて、参詣の場合に熱くのは、願事を聽て貰ふために、神佛に賄賂を贈るのだと申して居ります。所謂地獄の沙汰も金次第といふところでは、日本では神佛のお利益の程度は、お賽錢の上り高で見當をつけますが、支那では油斷が出来ぬので、現金を献する譯には行きませぬ。そこでお賽錢の小切手として、紙錢が用ゐられるのだらうと思ひます。

又た、支那の墓地には、土饅頭の上に白紙や黄紙が置かれてありますが、あれは金白紙といふ墓紙で、則ち香花に當るのであります。其の他、死人を納棺する際にも、錢型を刷つた庫錢といふ紙を入れます。これは死人が冥途での小使錢といふ意味ださうです。

一〇、支那の政治

漢字の「政治」とは、「政」は支をもとし正を音とする形聲會意文字で、「支」即ち竹の枝、それを取去る如く邪曲なるものを討平して正につかしむることが「政」であり。「治」は水をもとし台を音とする形聲文字で、「理」の代用で理は玉を細工する生地取りの義ですから、溜り水を地を切り開いて、疏通するのが「治」であります。故に、「政治」の字義は、不正混濁を打破すること、正明の境地を建設すること、二つの活用を意味して居るのであります。

由來支那で政治を口にする者を、讀書人と申して参りましたが。この讀書人たちが引合に出す政治の原則は孔子の言説にあるのです。孔子の政治觀のうち中庸に載つて居るものは、最も代表的なものと思はれます。それは魯の哀公といふ王様が、政治とはどういふ事かと問はれたるに對して、孔子は次の如く答へました。

「周の文王武王の政治が、まだ魯の國には其の方策を存して居るから、人さへ得れば則ち周の全盛時代の政治が出来る。今日の急務は、君臣其の人を得ること、人さへあれば則ち政治が擧がり、人が無ければ政治も息む。人を以て政治を行ふは、尙地に樹を種る様なもので、其の成ることも速かで、丁度蒲や葦も生え易いようなものである。故に政治とは賢人を得るといふことで、賢人を得るには、君たる者が己が身を修めなければならぬ。身を修むるの法は、道によらなければならぬ。道を修むるには、仁に本づかなければならぬ。仁とは人と人との關係で、親兄弟親戚に親しくすることが最も大切である。義とは宜きに適することで、賢者を尊ぶことが最も大切な事である親しむべき者に親疎遠近の差をつけ、尊ぶべき者に貴賤高下の別を設ける、これが禮といふものだ。故に君子は身を修めなければならぬ。身を修むることを思ふならば、親しむべき者に事へなければならぬ。親しむべき者に事へることを思ふなら、人の人たる所以の道を知らなければならぬ。人の人たる道を知ろうと思ふなら、天を知らなければならぬ。結局政治の根本義は、天命を知るといふことである。」

この天命を知る方法が祭で、支那人のいふ祭祀とは、前に述べました敬神崇祖の典禮をいふのであります。

支那の上古では、天から任命された帝王が、祭祀に依て天命を承り、それに依て民衆を指導し朝廷百官は、祭主たる天子を補佐してお祭りに奉仕し、民衆の世話をやくべきものと信じて、神妙に振舞ひ。民衆も亦、其の勞苦の産物を天神への御供へ物として、喜んで献上して居たのです。ところが、この補佐役のうちに、悪賢い知慧者が出て、祭主の地位を奪つて自ら祭主になりますし、色々お祭りの規則や作法をつくつたりして、お祭りに参列する者に窮屈な思をさせるばかりか、どうもお祭りが民衆の肚にびんと響かない。そうすると、百姓が自ら進んで献上してゐたお供物が集らぬので、今度は取立てることになりました。(献納と徴収とは、出す者の心理に天地の差があります)併かも徴収されたお供物の大部分は、祭主一家が着服して、神の御用に立てられるものは、ほんの一部分に過ぎないことが曝露しては、民衆が面白く思はぬのは當然の事です。そうすると、祭主は頗る利益のある職業となつてしまいます。昔から支那では、政治を王業、覇業などと稱して、農業、商業などと同様、人間の職業の一部門と心得て居ります。職業になると競争が起るのは必然の事で「王侯將相何んぞ種あらんや」と叫ばれ、祭主たる君主に落ち度があつたり、其の威勢が衰へると、取て代らうといふ野心家が續出します。これが即ち革命です。支那の革命といふものは、中國といふ大きな氏子を有する神社の、祭主職のお株争ひで、競争者

を仆した者が祭主になり、お祭の眞似事をして、氏子錢を着服し、自家の地位擁護のために、一族郎黨を要所に配置し、壯丁を傭つて番をさして置くだけの事です。其の他の事は氏子共の勝手にさして置くことが、祭主たる王侯に取つて都合のよい事でもあり、又た氏子たる民衆の望む處でもありません。

支那人のいふ政治と、その實際とは、周が天命を窃んで以來、こうも喰ひ違つて來ました。それには、眞人ならぬ衆人中の聖賢の徒が、その非違を糺明することなく、却つて之を庇つて、周の政治を謳歌し、地上の人間界の調和だけを重視して、聖智、仁義、巧利を説き、眞に民衆の生命の根元たる、主祭神黄帝の神格を、民衆に徹底させ得なかつたことに、因るものであります。黄帝とは、少彦名命即ち高皇産靈神の神子であることが、明白になつた今日、其の氏子たる支那大陸は則ち皇國の分社であることも亦當然であります。分社に屬する氏子は、本社にいます眞の「カミ」に歸服奉仕して、始めて天命を知るといふ事になるのではありますまいか。

一一、八紘一宇の御神政

別天神コトアマツカミ五柱イツハシナナ七代の神業成り就りて、天照大神アマテラス生れ出でましたとき、祖神は天照大神に「授

くるに天上の事を以てしたまひ、更に皇孫天降りますとき、天照大神は高皇産靈神と共に、皇孫に向はせられて「葦原瑞穂國は吾が子孫の可王地なれば、皇孫就まして治らしめたまへや、寶祚は天壤と與に窮無く隆まさむ（古語拾遺に據る）」と、仰せられたのであります。祖神のこの仰せのまに「クニ」を治ろしめして、高天原を築成されることが、天津日嗣の神業で、これを「マツリ」と申しまつり。「マツリ」の一部、表現的の行事を「マツリゴト」といふのであります。

前に申しました通り、「マツリ」の神儀行事として、祖神が教えたまふたものは、先づ祓禊であります。この祓禊を「マツリゴト」の方面から見ますと、(一)高天原の築成を妨害する妖魔の類を、掃蕩壓服するために、神劔即ち軍備の充實といふこと。(二)妖魔の跳棄跋扈を牽制するための祓具即ち法制刑罰の整備といふこと。(三)禊、即ち靈を注ぐために、魂の教化といふこと。この三つがその要素であります。その他の財政金融、殖産興業、運輸交通など、「物」を作つたり、運んだり、分配したりする事は、三要素の補助的のもの過ぎませぬ。然るに、この「物」を作り、殖すといふことは、今日では政治の最も重要な眼目になつて居りますが、「物」とは一體何かと申しますと、古典には「ミテクラ」と申し、幣帛の文字を充てゝ居ります。この

「ミテクラ」の「ミテ」は御手で、「クラ」は構成蒐集で倉、即ち勞力の蓄積。この四音合成の言葉は「神の御手の御働きの蓄積」の義であります。私共人間の生活必需品は、一品たりとも私共が創造することは出来ませぬ。みな祖神が造化の神的妙用を私共の上に現はしたまふて、造らせ給ふものでありますから、一切の「物」の用途は祖神の神意に存するのであります。

古典は、この幣帛製出の緣由として、祖神が、大玉神即ち祭祀を掌る神をして、諸部神を率ゐて、神鏡、衣服の資料、軍器、工具、調度諸雜品、家屋に至るまで、一切のものをお作らせになつて、天石窟戸開き即ち高天原築成の御用に、お充てになつたと申してあります。古典の神代卷は、曾て一度あつた人間歴史ではなく、「永遠の今」に行はるゝ祖神の御教でありますから。今日私共が物の生産工作に従事するとき、それは神命に従ひ、神の御力によつて、神の御用品を製産するので、私共自身のために、私共の力で作るものではありません。故にその生産物に就ては、私共はこの難有き御用を奉仕し得た、光榮を感謝し、その任務の終了を報告し奉るのみで、その出来上つた物の用途、處分などに就ては、一切現身神にまします、日本天皇が祖神の御旨のままに、執り行はせ給ふのであります。

然るに、延喜式以來、この本義がぼんやりして参りまして、祝詞などには、自分達が作つたも

のを、各自の用に供することが出来るように獨りぎめして、先づその見本を、神前に献げて神恩を感謝し、又は神の御機嫌を取らうとするように、書かれてあるのは本末顛倒であります。それは支那思想の影響を受けて、「祭り事」が「祭」から分離されて、祭り事を顯事として、これに重きを置き、祭り事を分離した狭義の「マツリ」を幽事として、敬遠したため、崇神天皇の御世には、天皇の徳を以てしては、治められぬといふ危機を招来しました。そこで、更めて祭政一致といふことが、叫ばれるようになったのであります。

凡そ一致と申すは、二つのものが協同する事でありませぬ。然るに、祭と政とは元來二つのものではなく、政とは「祭り事」で、「ミマツリ」の一部分に過ぎませぬから、一致といふのは妥當ではありませぬ。

崇神天皇以後、神言靈の傳へが漸く失はれたため、妖魔を掃蕩し、諸魂を鎮定する、高天原築成の第一義は、幽事として巫祝の職務として餘り重ぜられず、轉生人が跋扈して、顯事のみが朝廷の仕事になつて、支那の文物制度を移入し、色々な施設をして國利民福を計ることを、祭り事即ち政治といふことになりました。それは妖魔に、此處までお出でと、押搦されて居るとも知らず、妖魔を唯懐懐して顯界を平安にしようと、これでもかこれでもかと、色々手段を構じ、施

設を施すものであります。そうすれば、する程妖魔はつけ上がるのです。文化とは、この妖魔の誘惑に引ずられて行く状態をいふのであります。

文化とは、英國の哲人がいつて居るように、一つの病氣——精神病——なのです。(エドワードカーペンター著「文明と其の原因及救治」参照)また印度人數千萬の魂を預つて、あの枯木の如き手で敢然英國の魔力から同胞を擁護して居る「聖者」ガンヂーは、文明の意味に就ての英國人の質問に對して、次の如く申して居ります。

近代文明に醉ふ者は近代文明に反對するのを好まない。寧ろ其の支持の事實と議論とを見付けようとしてあせる、これを眞實と信じて無意識に行ふ。夢を見て居る間は夢を信するが、眠りから目覺めると欺かれぬ。文明の害毒の下に働く人は、恰かも夢みる人だ。我等が通常讀むものは近代文明擁護の書物、其の文明は其の信者の間に、頗る善人すら、狐疑する所なく瞻仰される。彼等の書物は又我等を恍惚たらしめる。かくして次第に渦中の人となる。

我等に先づ「文明」なる語で描かれる事態が、何なるかを考へさせなさい。「文明」の裡に生活する人民は、肉體的安樂を生活の目的とするといふ事實に、その眞の標準が置かれてゐる。(註、文化、文明とは體主靈從の生活、換言すれば禍津毘に引ずられ行くことであることを明

言したものです)……これは様々の權威ある書物(註、即ち禍津毘の禍言)に依て確むることが出来る。これ等一切が文明の眞の標準なのだ。そうして若しこれに反對でもしようものなら無知だとされてしまう。此文明は道徳を構はない、宗教も頓着しない。其の信者は靜かに、自分の仕事は宗教を教へるのではないといふ。人によりてはそれを迷信的産物とすら思ふ。宗教の外套を着て、道徳を饒舌り廻はす者すらある。けれども二十年の経験後、私は不道徳が道徳の名の下に頻りに教へられるといふ結論に到達した。文明は肉體の快樂を増さうと求め、憐れかく爲すことすら失敗する。(「印度自治」の一節)

千四、五百年の間、支那から侵入した妖魔に魅入られ、引ずられて居た日本は、相次ぐ直日人の顯現に依て、復古の事業を翼賛し奉つて、明治維新を迎へ、天皇御親政の盛儀を拜することが出来ました。その時參議西郷隆盛は、明治維新を以て、神武天皇中國御平定の先蹤に則らせたまふよう奏上して、御嘉納を得ました。明治天皇は明治三十七年の御製に

橿原の宮のおきはにもとづきてわが日本の國をたもたむ

と仰せられてあります。茲に日本の政治は八紘一字の祭り事であることの大本が確立したのであります。

己未ノ年三月辛酉朔丁卯、命ヲ下シテ曰ク。「我東征茲ニ六年、皇天ノ威ヲ頼リテ凶徒戮ニ就ク。邊土未ダ清マラズ、餘妖尙梗シト雖モ、中洲ノ地ニ復風塵無シ、誠ニ宜シク皇都ヲ恢キ廓メ大壯ヲ規摹ルベシ。而シテ今運、此ノ屯蒙ニ屬ヒ、民心朴素ナリ。巢ニ棲ミ穴ニ住ム、習俗惟レ常トナレリ。夫レ大人ノ制ヲ立ツ、義必ズ時ニ隨フ。苟モ民ニ利有ラバ、何ゾ聖造ニ妨ハム。且當サニ山林ヲ披キ拂ヒ官室ヲ經營リテ、恭ミテ寶位ニ臨ミ、以テ元元ヲ鎮ムベシ。上ハ則チ乾鑿ノ國ヲ授ケタマウ、徳ニ答ヘ、下ハ則チ皇孫正ヲ養ヒタマフ心ヲ弘メム。然シテ後ニ六合ヲ兼ネテ都ヲ開キ、八紘ヲ掩ヒテ宇ト爲ムコト、亦可カラズヤ。夫ノ畝傍山ノ東南橿原ノ地ヲ觀レバ、蓋シ國ノ塊區カ治ルベシ。」是ノ月ニ即チ有司ニ命セテ帝宅ヲ經リ始ム。(日本書紀卷等三 神日本磐余彥天皇ノ卷)

餘論

戦争と平和

序説

支那事變が始まつて間もなく、私の家に入出入する乾物屋の主人が召集されて、輜重特務兵として出征しました。彼の家には若き妻と二人の幼児が遣され、近所の生家には年老いた両親が別居してゐるのです。彼はその四男ですが三人の兄たちはみな夭折して、今では彼がこの老夫婦が杖とも柱とも頼む獨り息子であるのです。父親は日露戦争の時旅順攻撃に参加したといふ老勇士だけに伴の出征を心から喜んだのですが、母親はかけかえのない獨り息子の事なので、お上はなぜうちのようなところの子供をお取りになるのだらう。戦争といへば國と國との喧嘩ぢやないか、伴には小さい時から喧嘩などするのではないと、学校の先生もまたうちでもよく教へてあるので、あれに限つてついで喧嘩などした事もない子です。喧嘩したくて仕様のない若い奴は他にいくらも居るのに、喧嘩の嫌ひなうちの息子を引出すとは何といふ事だらう。日本と支那とそう毎度喧

嘩せず、よく話をつけたらわかりそうなものぢやないか。……と遇ふ人毎に掻き口説くのでした。

これに對して誰も戦争は喧嘩でないことを、この母親に満足のゆくように説得することが出来ず。唯お座なりに、御國のためとか、東洋平和のためとか、軍人の本分だ、名譽だといふ丈けのことでした。

又た北京に二十餘年學校を經營して、支那人にキリスト教の傳道をして居る先生の話に、事變の始め頃若い軍人のうちには、國家が個人の生命を要求する理由、自分が死んでそれが御國のためであり、また自分の任務であるといふことも諒解出来ない。自分が充分納得がいつて安心して死ねるよう、教へてくれと言つて來る者があつたといふことです。

それに就て、事變以來新聞、雜誌、ラヂオ等を通じて、私共が見たり聞たりする所謂名士、高僧、學者などのお話は、どれを伺つても成る程と合點のゆく様なものはなく、中には喧嘩と戦争の區別さへつかず、ましてや「イクサ」は戦争ではないことに至つては、到底想像だもされぬようであります。これを文部大臣荒木大將の言を借りて言へば、まさしく明治以後の教育の貧困の暴露であり、また既成宗教の形骸化の告白でもあります。これでは特務兵の母親のような人達に

納得させる事は出来ず、若い軍人に「イクサ」の神髓に徹底さして、安心して死なすことも出来ませぬ。これは「クニ」に關する重大事であり、「イノチ」にかゝる現實の問題でありますから、單に頭で組み立てた智慧の言葉だけでは言ひ盡すことは出来ませぬ。それを身を以て説いた楠正成や菊池武時などは。さすがに偉い「日止」たちであつたと思ひます。

建武三年五月、足利尊氏九州の軍勢を催して、京都に攻め上ると聞えたる時。當時兵法家として並ぶ者なかりし楠正成は、叡山行幸の外必勝の策あるまじき旨細々計を献りけるに。坊門幸相清忠等君側の權を恣にする公卿衆の體面論に遮られ。剩え、「敵の大軍に聞き怯ぢしか、朝廷の恩を餘所に足利方の權勢に付かん心構へか」とまで罵られ。朝議は正成をして兵庫に下り尊氏の軍を迎え伐たせるに一決なし、その旨勅命ありたり。當時の武家一般の習はしにては、一身一家のために進退を決するに何の屈託もなかりしに、正成はたとへ女童にひとしき公卿衆の計ひとはいへ勅命なれば、「此度の合戦勝利原より期し難し、我等存命無益と見決め、切めてはこゝに命を斷つて君恩の萬一に報い奉らむ。生きても忠義、死でも忠義、奉公に生死は無し。身を以て誠を盡し得ずば、魂を以て奉公の實を擧げんこと、我等兼てよりの存心なり」と一族郎黨に布令

して京都を出立ち、正行を櫻井驛に呼びて申すよう。

「假し世の中はいかに變り行くとも、代々の魂に變りあるべからず、一たんの身命を助からんために、多年忠勤の志を捨て、降人には出でまじぞ。人としては忠孝二道を遺憾なく仕遂ぐるが隨一の務なれ、とても斯くても勝つまじき戦に臨んで徒らに骸を曝すが果して忠か、死して形無く魂のみ残つて禁闕の守護に任ずるもまた忠なれ。汝いかに心を鍛ふても、根は凡夫、時には君を怨み奉ることもやあらん。殊さら亂世の常、加増褒美感狀の厚薄につき、残ましき凡夫の情出でんにも限るまじ、その時は天照皇太神官の御鴻恩を思ふべきなり。我等弓矢を執つて世に立つは偏に天照皇太神官の厚恩に報い奉るに在ることを、子々孫々に申し傳へて忘れまいぞ」と。

今更詮術もなし此上は一死國に殉じて、天下の人心を激勵せんため、花々敷合戦して賊軍の氣勢を挫かんものと、兵庫へと向ひ二千餘騎の手勢を引き具して本營を會下山に置きたり。日頃正成が守本尊として肌身離さず所持し、その靈驗により幾度か目覺ましき勝利を獲させ、身命を完うせしめ給ひし「愛染明王」を、神歸る我身に最早用はなしと、郷里河内に送り返して、本營のうしろにある廣嚴寺（俗に楠寺といふ）を訪ねた。

丁度その頃臨濟派の巨頭で、學問もあり徳も高い、鎌倉建長寺の方丈明極禪師がその寺へ來合せて居た。正成は禪師と初對面の挨拶が終ると共に、

「生死交謝の時奈何」と問ふた。（正成は年來の修養で、深く生死の大事を究めて居た。生きても忠義、死んでも忠義と思ひ決して居るし、この場合生きて軍に盡すよりも、死で士氣を鼓舞する方が、朝廷の御爲めであると信じ。此度は潔く討死とは覺悟したが、何さま生死は大事である。生より死に入る刹那の感覺を極めて置く要があると思つたので、明極禪師の前へ出て、現世から冥土へ交る時の心持ちを尋ねたものと思はれる）すると、明極は聲に應じて

「兩頭俱に裁斷して、一劍天に倚て寒しと」答へた。（兩頭は生と死とである、云ふ心は、いつまでも生と死と兩つの頭に執着して居ては、忠義に二つの途があつて眞が徹らぬ。宜しく進んで生死の觀念を捨てよ、生死の執着から離れて了へば、天も地も一つである、生も死も一如である。すれば忠義の利劍は長く天に倚つて輝く、身は滅しても精神は天と共に不朽であると云つたのである。換言すれば「人生に結論なし唯だ創造の一途あるのみ」といふことになる。）

正成は續いて「落處什麼生」と問ふた。（即ち「落ちつくさきは何うでございます」と聞いたのである）此の時禪師は滿身の力を一語に籠めて、寺の本堂も震ふように「喝」と一聲した。正

成は徐かに立ち上つて一禮した。禪師は嚴かに「爾、徹せり」とつた。

正成はやがて本堂へ參詣して、一抹の香を燒き、少許の回向科を手向け、禪師にも別れを告げて悠然と本營へと歸りけり時に建武三年五月二十四日、その翌日戰破れ身に數傷を負ひ、今はこれまでと一民家に入つて自害せんとするとき、弟正季に「そもく最後の一念に由つて善惡の生を引くといふ、九界の間、御邊の所願何れにかある」と訊ねたるに、正季は莞爾と笑つて「されば候ふ、七生まで同じ人間に生れて朝敵を滅ぼさんと存じ申す」と答へたり。正成は世にも快げにこれも莞爾と笑ひ返して「罪業深き惡念とはあれど、われも左様に思ひ居る、一座七十餘人の魂魄、天にも上らぬ地にも入らぬ、七度生を替へて、此の本懷を達せでは止まじぞ」と。兄弟刺し違えてぞ果てにけり。(以上渡邊霞亭著「楠正成」に據る)

この楠正成さへも一目置いた菊池武時、頼山陽をして「芳楠未ダ必ズシモ黄花ニ勝ラス」(云ふ心は、楠公も菊池氏には及ばず)と贊咏せしめただけに、その信仰は正に日本精神の神髓であります。次に蟠龍井澤節長秀輯「菊池傳記」に據つて、武時の面目を描いて見たいと思ひます。

元弘三年閏二月、後醍醐天皇は隱岐を遁れて伯耆船上山に幸し給ふや、九州の豪族菊池、阿蘇少貳、大友等に綸旨を下し錦旗を賜ふて、九州探題北條英時を誅戮すべき旨御錠なり。(即ち勅命降下し、軍旗を授與されたのであります)こゝに菊池武時は次郎と稱し代々隈府の城に居り、豫て大慈寺の大智和尚を師とし、入道して真空寂阿と號しけるが、父祖以來勤王の志篤き武將なれば、武人の面目一門の譽れと感激一方ならず。少貳妙惠、大友具鑑と共に北條退治の謀を廻らしける半に、少貳大友の兩人は忽ち心かはりして、この由北條方に内通し却つて菊池を討たんと圖りけり。武時は傳へ聞いて大に怒り「日本一の不當人共を憑のうだるは、武時一生の不覺なりけり。よし彼奴等犬侍ども逆賊北條が虎威に怯ちて我に味方せぬとも、合戦の叶はぬことやある」と、一族郎従わづかに百五十餘騎を率ゐ元弘三年三月十三日未明、錦旗を春風に翻かして、菊池を發して北條英時が籠たる博多の城に押寄する。既に櫛田明神の社前に差しかりたるに、いかなる故にかありけん、武時が乗たる馬はたと足をとめて進まざりけり。世の常の武將ならんには、馬より下りて參詣し戰勝の祈願など込むらん、さなくば神明の止めたまふ不吉の出陣と恐れて退り歸るべし。されど武時は馬上決つと神殿を睨み、大音聲に申すよう「寂阿入道いま天津日嗣にまします現身神の神命を承はり、畏多くも錦の御旗を捧げて逆賊征伐に馳せ向ふに、我

を止むるは必定邪神と覺えたり」と、重藤の弓に鏑矢をつがひ

武士の矢竹心の一筋に思ひきるとは神は知らずや

と詠じ、神殿の扉をはたと射たりければ、馬ゆくこともとの如し。博多の在所々々に火を放ち攻め立てたるに、北條方にては思ひ設けたる事なれば、城戸を開いて斬て出で雙方入り亂れ戦ふに、菊池方打勝ちて城兵二百餘人を討取る。北條英時も既に危く見えしに、少貳妙恵、大友具鑑八千餘騎にて來りて英時を援く。武時今は利を得がたく思ひ、嫡子武重を呼んで「汝は是より肥後にかへり死残りたる郎従をあつめ、再び義兵を擧ぐべし」といひければ、武重、「仰せとも覺へ候はず、兎も角も安否を共に決し申すべし」とて、中々落ち行く體に見えざりしかば、武時大に怒つて「汝が日頃の思慮に拔群相違したる返答かな、凡そ小信を守つて大義を忘るゝは良將雄士の耻づる所なり、我は朝家の爲めに命をこゝにとむ。汝はこゝを遁れて節にあたつて命を奉るべし、遅速ありともいつか死を免れんや」と。

古郷に今宵ばかりの命とも知らでや人の我を待つらむ

と一首の歌を袖に認めて武重に與へ、時移るにとくくといさめしかば、武重は離別の涙に袖を濡らしつゝ父が遺訓に従つて、葉室吉宗以下五十騎ばかりを引分けて肥後國に落ち行く。

武時今は思ふ事なしとて次男頼隆以下百騎ばかりを左右にたて、一文字に驅入り散々に打破り英時が後見齊藤日向次郎以下數十人を討取といへども、少貳、大友が大勢後より取圍んで雨の降る如く射ける矢に、武時はじめ一族郎従悉く手負ひければ、武時多勢を驅抜いて見るに、八十騎ばかりは討たれて殘兵纔かに二十騎にぞなりにける。いづれも深手浅手五ヶ所七ヶ所蒙らぬはなし。武時いまはこれまでぞ、方々斯く深手餘多蒙り身體自由ならねば、本意を達せんこと叶ひがたし一人たりとも敵をうたんと思ふぞや、いざ敵と刺違へんとて、一度に敵陣に驅入り二十騎の者ども向ふ敵と引組々々落ち重なり、刺違へてぞ死たりける。時に武時年六十二。

この譚を読んで、何んだ、六十越した老いぼれ武者が、一個中隊にも足らぬ兵力を以て無謀にも防備のある何十倍の敵に向つて飛びかゝり、たつた一日で全滅したのでは、何の效もないではないか、どこの偉いのだといふ人があるとすれば、それは眞の日本精神を解し得ない者です。兵力の多寡、戦局の廣狹、現前の戦果などによつて、「イクサ」の價値を評價したり、その成敗のあとを以て將帥の心事を是非するが如きは、存在の世界しか見得ない「轉生人」の事です。そこはさすがに楠正成、建武中興の業成り、朝廷に於て論功行賞の御評議があつたとき、菊池武時を

以て元弘の事變に於ける忠功第一たるものなりと推擧しました。正成にして甫めて武時の眞價が解つたのです。それから三年の後に起つた楠公櫻井驛の父子袂別、武運長久の守本尊を身から離したることなどは、正成がこの先輩から受けた刺戟に負ふ處大なるものがあつたのです。(それは菊池武茂の七男武吉が、楠正成の幕僚として常にその帷幄に参し、湊川に於て正成と最期を共にしたことなどに依てもわかります)

明治天皇は武時の忠功を深く嘉みせられ、従一位を贈られ給ひ、明治十一年菊池の城趾に別格官幣社菊池神社を造營して、武時、武重、武光の忠魂を祀らせたまふたのであります。爾來六百年、凡そこの菊池一族くらい多くの御贈位者を出したものは他にありません。それ程にこの菊池一族には、勤王の血——即ち日本精神——が躍動してゐるのであります。その最高頂に達したものが即ち西郷隆盛です(西郷家は菊池の一支族です)。言擧げせぬ——徒らに口先きの宣傳をしない——のが日本精神の特質であります。この日本精神の結晶たる菊池一族の、實踐躬行による六百年の感化は波紋を畫いて周圍に及び、今日九州健兒が剛勇日本——日本一は即ち世界第一——の精兵として、嶄然異彩を放つに至つたのであります。

現代日本で軍神と崇められる廣瀨中佐、橋中佐から爆彈三勇士、支那事變中の華西住大尉など

みな九州の産——菊池魂の權化——であります。

明治天皇御製 おのが身のまもり刀は天にますみおやの神のみたまなりけり

ここで話を本筋に戻して、戦争とは？ 平和とは？

端的にこれを申せば戦争とは生死の争ひであるが、「イクサ」とは活かしたまふことです。そして平和とは眞に活かされてゐることです。

故に生死といふことが解らなければ、戦争も平和もわかるものではありません。

唯だその死かた、活かたに「日止」としての生死、「火止」としての生死があるので、敢て言擧げする必要が生ずるのであります。

戦争と「イクサ」

一、戦争に對する社會通念

凡そ戦争に對する考へくらしい、古來東西とも間違ひ甚だしいものはありますまい。西洋や支那は本來個人主義の轉生人の集團、即ち社會で、出來合ひの國家組織を有つたことはありますが、

未だ曾て眞正の「クニ」といふものを知らぬのですから無理もありません。しかし日本人も支那文化や西洋文化に感染してからは、支那人や西洋人と同じ様な間違つた考が一般的のものになつて、「イクサ」の眞の意味が解らなくなりつゝあります。

西洋人の戦争に對する考へは、極少數の思想家を除いては、普通一般には、戦争とは一概に人を殺傷し生命を奪ふ最も非人道的な罪惡行爲であるとし、そつういふ罪惡から人間を救ふように、「神様」に祈りするのであります。これはユダヤ民族の結成者モーセがエホバの神託を受けて、ユダマ人に授けた十誡といふ法律の中に、「汝、殺す勿れ」といふ戒律があります。それが西洋人の意識に潜在して居るせいでもあります。彼等のように「個が集つて全をなす」といふ、ギリシア的理論から、國家とは個人が集つて出來た組織體だとすると、國家の行動は即ち人民の總意に本づくものですから、個人間の喧嘩と國家間の戦争と別に變りはないわけです。

このモーセの戒律を、天主教では解説して、「人を殺し。自害をなさんと思ふ事。妄に人を打ち、或は傷け、害を負はする事。喧嘩鬭争をなし、或は人を辱むる事。故なくして自ら生命を危険に至らしむる事。以上の事を勧め或は之をなす人に協同する事等」とし「不意の即死より主、我等を救ひ給へ」「惡疫、飢饉及び戦争より主・我等を援ひ給へ」「終なき死より主我等を援ひ

給へ」と、世界各國に在る一億の教徒に祈らせて居るのであります。(そのうちには十數萬の日本人と、三百萬の支那人をも含んで居ります)

又英國教會は、英國の國教ですから、その用ゐる聖書、祈禱書等は議會で人民の總意に本づいて定められた、國法的の性質を有するものですが、その祈禱書のうちに戦争のための祈禱として「王の王にして萬物を統べたまふ神よ、主の能力に敵し得るもの一人もなし、唯主のみ罪人を罰し、悔ゆる人の罪を赦したまふ、請ひ願はくば我等を祐けて、敵の手より救ひ出し、主の護りの甲冑をきせ、常に危難を防ぎ、たゞ獨り勝利を與へ給ふ主の御名を崇めさせ給へ……」とあり。教徒は「主よ、我らの生涯泰平をあたへ給へ、地の極まで戦争をやめしめ給へ」と祈るのであります。

これが新舊キリスト教を通じての、戦争に對する觀念の結晶で、西洋人の通念の現はれであります。ロシアの文豪トルストイは「戦争と平和」といふ大著述を遺して居りますが、要するに、彼も亦西洋人ですから、以上の通念以上に出で得なかつたのです。

この西洋流の戦争觀が、明治以後西洋の物質文化と共に日本にも浸潤し、殊に明治以後の日本の學校教育が國語よりも歐洲語、就中英米語を重んじこれを強制したため、日本の智識階級の頭

を支配するようになって、平和だの、人道だのといふことがしきりに叫ばれて居ります。しかしそれは日本のほんの薄い外皮だけで、今日尙日本人の九〇パーセントを支配するものは、何といつても、千五六百年の間浸み込んだ、支那思想及び支那人に依て媒介された印度思想であります。

二、支那人の戦争観

前に屢々申しました通り、支那人は極端な個人主義者で、未だ曾て眞の國家を有つたことがなく、彼等のいふ國家は、或個人がその欲望の満足のために、多數の人間を一廓の中に纏めたまでの事で、單に群集にしか過ぎませぬ。この「群」といふ文字が、最もよく彼等の謂ふ國家を説明して居ります。群といふ字は、君と羊から成つて、多數の羊をまとめてそれを引卒した形で、寄り合ひで一體を意味するものではありません。こゝにいふ群集の引卒者と、引卒者との利害の衝突が即ち彼等のいふ戦争です。だから、飛び抜けて強いか、或は利巧な個人（英雄豪傑）に依て、戦争の勝敗は決するのであります。そして引卒者以外の多數人は、みな引卒者の犠牲になるのである。「群羊を驅つて猛虎に向ふが如し」とか、「一將功成つて萬骨枯る」などと悲鳴をあげて來たのです。

古來日本語の「イクサ」に對して、「戦」、「軍」の漢字を充てゝ來ましたが、「戦」とは戈をもととし單を音とする形聲文字です、戈は即ちホコで、人と人が戈を執つて闘ふの義、「軍」とは車と勺（包の本字）との會意文字で、マハリカコム圓の義。古代支那では軍隊は兵車で組織されたところから、軍の字は車をもととしたのです。周時代には一萬二千五百人を以て一軍としました、これはタカカヒのための組織で、「イクサ」とは違ひます。（彼我の古典を讀むにはこの點注意を要す）支那人のこの本質を知悉した老子は、これに眞の「イクキ」の意義を教へても到底解かる筈がない、それよりも、羊は羊らしく、噛み合などさせない方が無難だといふ見地から、「道德經」のうちに次の如く述べて居ります。

道ヲ以テ人主ヲ佐クル者ハ、兵力ヲ以テ天下ニ強國タルコトヲ爲サス。兵ノ事ハメグリカヘルヲ好ム、人ヲ害スレバ、メグリメグツテ我亦害ヲ蒙ルニ至ル。軍隊ノ屯營シタル地ニハ荆棘ヲ生ジ、大戦争ノ後ニハ必ず凶年アリ。

兵ヲ用ユル事ノ巧妙ナル者ハ、其佳ナレバ佳ナル程愈々多ク人ヲ殺ス譯ユヘ不吉ノ人物也。他ヨリニクマレル故、有道ノ士ハ兵ヲ善ク用ユルヲナサズ。平常ノ事ニハ左ヲ貴ビ、兵ヲ用フル時ニハ右ヲ貴ブ。ヨク兵ヲ用ユルハ不祥ノ事ヲ行フモノ故君子ハ之ヲナサズ。已ムヲ得ズシ

テ兵ヲ用フレバ、無味淡々強ヒテ勝タントスル如キ欲念ナキヲ上トス、故ニ勝テモ喜ブベシトハセヌ也。然ルニ之ヲ喜ブ者ハ、是レ人ヲ殺スヲ樂ムモノナリ。夫レ人ヲ殺スヲ樂ム者ハ、志ヲ天下ニ得ベカラズ。故ニ吉事ニハ左ヲ貴ビ、凶事ニハ右ヲ尙ブ、兵事ニハ偏將左ニ居リ、上將軍ハ右ニ處ル。コレ、兵ハ凶事ナレバ、葬式ノ時ノ禮ヲ以テ之ニ處ル。人ヲ殺スコト多ケレバ、悲哀ヲ以テ之ニ泣キ、戰勝テバ喪禮ヲ以テ之ニ處ル。

善ク士タル者ハ、強暴ニシテ武勇ヲ以テ人ニ先ンセントスル事ナシ。善ク戰フ者ハ怒ラズ、眞ニ善ク敵ニ勝ツ者ハ敵ト争ハズ。善ク人ヲ用フル者ハ、身ヲ卑フシテ却テ人ニ謙ル。是ヲ争ハザルノ徳トイヒ、是ヲ人ノ力ヲ用フトイヒ、是ヲ天ニ配ストイフ。コレ古道ノ極致ナリ。

兵家ノ言トシテ相傳フル語アリ、我ヨリ進ンデ戰ハズ、已ムヲ得ズシテ敵ニ應ズル也、進ミ戰ハズシテ、成ルベク敵ヲ避クト。

進ミ戰フ者ハ其ノ行陣ヲ整ヘテ行き、臂ヲ攘ゲテ以テ兵器ヲ執リ、前進シテ以テ敵ヲ突ク、行カザレバ行陣アリト雖モ行ナキガ如ク。攘ハザレバ臂アリト雖モ武器ナキガ如シ。之ヲ突カザレバ敵ノ前ニ在ルモ敵ナキガ如シ、禍ハ敵ヲ輕ンゼルヨリ大ナルハナシ、敵ヲ輕ンズルハ強ウシテ人ヲ殺スヲ喜ビ、進ンデ取ル譯ユヘ、慈、儉、謙ノ三寶ヲ失フ譯ナリ。故ニ五ニ兵ヲ舉

ゲテ相加フル時、已ムヲ得ザルニ出デ、感然トシテ人ヲ殺傷スルヲ哀ム者ハ必ズ勝ツ。

孔子も亦御多分に漏れず、戦争を凶事として居るので、支那人の間には「好い鐵は釘にはせず、好い人は軍人にはならぬ」といふ諺まである位で、戦争などする奴は葬式に備はれる人夫同様、人間の屑だときめてかゝつて居ります。こういう眼で、彼等は自國の兵隊を見て居るものですか、勢ひ他國の軍人及び制服帶劍者に對しても好感を有ち得ないので、そこに色々な誤解紛争が起るのです。近頃は軍隊に對するこの種の癖見が多少變つて來たようにも思はれますが、これまです支那では、實際戦争する奴に碌な者はなかつたのです。兵士、巡查、匪賊、無賴漢これは失業した不良分子の臨時仕事で、糊口のため時と場合により、そのうちのどれかになるのです。

昨日の馬賊は今日は堂々たる軍人、今日の無賴子ウライイッは明日は警官といふのは、支那では敢て珍らしからぬ事です。

古來支那には、諸子百家即ち學術技藝の専門科目のうちに、作戰用兵の専門的研究家がありました。それを兵家と申して居ります。この兵家のうち特に戦争哲學の大家として、世界的に有名なものは孫子と呉子ですが、その兵法の奥義は「敵を知り己を知る者は百戰殆あやうからず」といふに盡きて居ります。敵の力を計り知る事は必ずしも難事ではないが、己を知ることには到底出來ない。

これが出来るようなら戦争などはしませぬ。そこで「百戦百勝は善の善なるものにあらず、戦はずして他の兵を屈す、これ善の善なるものなり」と、實に支那人らしい利巧なことを言つてゐます。即ち不戦全勝を最善の策としてゐるのです。

然らば、不戦といふと、全然無爲無策で居る事かといふと、そうではありませぬ。武器を執つて戦はずして、却つてそれ以上の成果を收めようといふのです。それに就て考へられた方策は、先づ第一に人間世界の運命を掌る天上の神を祭る事と、邪靈妖鬼を驅使して敵を咒詛する事。次には巧みに敵の甘心を買つて饗宴に託して毒殺する事、美女や財寶を贈つて敵將を買収する事。流言蜚語を宣傳して相手方を攪亂し、その戦意を挫く事などであり、このうち買収戦と宣傳戦は、最近までの支那軍閥間の争覇戦にも、又た世界列國間にも盛に行はれて居るところですから、別に説明の必要もありませんが、第一の靈と魂とに倚る戦争に就ては、現に我邦でも、戦勝祈願祭だの、怨敵降服の加持祈禱などといふものが、公然と行はれてゐる以上。支那のそれが如何なるものであるかを、知つて置く必要があらうかと思ひます。

三、戦争と祭祀

支那の三國時代に（皇紀八五〇年頃）、魏の曹操が百萬の大兵を以て、吳の國（現在の浙江、江西）を歴し。楊子江第一の要害赤壁（即ち田家鎮、半壁山の相對する處）の下に、數千艘の軍船を停泊し、それを鐵の鎖で繋ぎ合せ、船と船との間に廣い板を渡して一團とし、正に江上に一大城廓を築き。今にも江を渡つて、一舉に吳の國を蹂躪せんとしたとき。吳の都督周瑜の依頼により、蜀の軍師諸葛孔明が行つたといふ、風を祈るの祭が、支那歴史上最も光彩を放つ戦の祭で、その後支那でも日本でも、それが真似られ、日本の城の天主閣の構築などに關係を有つて居るものでありますから、三國志により、その大要を次に申し上げます。

魏の水上城廓の有様を見て、（實は吳の方で間牒を放つて、魏が軍船を繋ぎ合せて一團にするよう仕向けたのであつた。）吳の都督周瑜も諸葛孔明の考へも、楊子江の上流から、柴を積んだ小舟を多數放流して、魏の水上城廓を焼打ちにすることに一致したのであつたが、それにはどうしても、東南の大風が吹いてくれないならぬ。然るに、時は舊曆十一月で、その地方の風向は西北がきまりで、到底東南の大風などは望むべくもなかつた。折角の妙計も手の下しようなので、周瑜は意氣沮喪して寢込んでしまつた。

ところが、孔明は昔異人に逢つて、「八門遁甲」の天書を授けられ、その天啓によると、上は風を呼び雨を喚び、鬼を使ひ神を役し。中は陣を布き兵を用ゐ、民を安んじ國を定むべく。下は吉に趨いて凶を避け、身を全うし害を逃るゝことが出来るといふのである。(孔明のあの神出鬼没のあざやかな戦法は、みなこの神授の方術によるものとされて、後世この八門遁甲の術が、支那でも日本でも盛に研究されたのです)

この神授の秘術を心得た孔明は、周瑜に對し三日三夜の間、東南の大風を天から借ることを引受け。焼打ちの用意をさして置いて、南屏山といふ處に出かけて、地形を見定め。東南の方の赤土を取つて(これが後に述べる日本古典の「イツノカジリ」と関係があるのです)、方圓二十三丈にして高さ三尺、三重の七星壇といふものを築いた。その下の一重には二十八宿の旗を建て、(東方には、青色旗で、角、亢、氏、房、心、尾、箕、即ち蒼龍の形を布き。北方には、黒色の旗で、斗、牛、女、虚、危、室、壁、即ち玄武の勢を作し。西方には、白色の旗で、奎、婁、胃、昂、畢、觜、參、即ち白虎の勢を振ひ。南方には、紅色の旗で、井、鬼、柳、星、張、翼、軫、即ち朱雀の狀を成し。これで四七、二十八面。(これはその方角に位する星の名です。日本の白虎隊だの、朱雀門などといふのは、これに縁つたものです)、第二の段には六十四面の黄色旗を立て

て、易の六十四卦を書いて八位を定め。最上の第三段には、束髮に冠を戴いて、黒羅の袍を着し、風衣、博帶、朱履、方裙の装ひをした者四人を立て。そのうちの左の一人は長い竿を持つて、鶏の羽を挿み、風を招くしとし。右の一人は七星の帯をつけた竿を持ち、風の色を試みさせ、後の二人は寶劍を左に捧げ、香爐を右に持つ(劍と火これが「ハラヒ」の神器です)、壇より下には旌旗、寶蓋、大戟、長槍、白旌、黄鉞、朱旛、阜纛を持つた者二十四人、四方を圍んで護衛をなす。

この壇の設備が完了すると、孔明は齋戒沐浴して身を清め(即ち「ミソギ」したのです)、道服を着て髪をさばき、素足で緩歩して壇に上り、香を焼き、天に向つて水を注ぎ、暫く祭文を唱へて、壇を降つて休息し。又た壇に昇つて、三度その祈りを繰返した。その日もいつか暮れて、天気はいよいよ快晴で微風でもないので、周瑜を始め一同、孔明は出鱈目をいつたものだろう、こんな冬にどうして東南の風などが吹くものかと、呟いてゐたところが、漸く夜の三更(午後十二時頃)の比になると、忽ち風の聲が颯と響いて來た。一同屋外に出て見ると、建て並べた旗が悉く西北に靡き翻つて居る、孔明の言つた通り東南の風が起つたのである。周瑜は小躍りして、豫て手配さしある焼打ちの着手を命じた。枯柴を山と積んだ二十艘の小舟は、東南の風を帆に孕み、

魏の軍船團へと矢の如く馳せ向つた。

近づいて一齊に火を放てば、楊子江一面火の海と化し、魏の軍船は見る見る焼けて、百萬の精兵殆んど水火のうちに滅び總司令官曹操も大火傷を負つて、命からがら逃げ出した。有名な三江の水戦赤壁の鏖兵とはこの事である。

こういふ出来事を、今日の科學の目で見れば、偶然の出来事に對する牽強附會の說のように考へられますが、二千年前のギリシア人の考へを土臺として築き上げて來た、所謂科學^{サイエンス}だけが自然の隱秘の扉を開く鍵だと思ふのは、西洋かぶれの迷信に過ぎませぬ。東洋には三千年來立派な科學が存在してゐたのです。支那獨特の物理が「易」で、その化學が「五行說」です。この奥儀を究めるときは、現象界の秘奥を探ることが出来るのです。唯だ東洋のものは公開的でなく、一種の秘傳として非公開的であるために、種々の誤解を招いで來たまでの事です。孔明はこの易と五行說の蘊奥を極めて、それで科學的變化を起したものと見るべきであります。(易と五行說に就ては人生創造第一八二號に述べて置きましたからそれを御覽下さい)

四、神事としての「イクサ」

以上述べて來たような、西洋人や支那人のいふ戦争は、日本語では「タタカヒ」と申し、武器を執つて勝敗を決する「叩き合ひ」の義で、支那の俗語で戦争も喧嘩も共に「打仗^{ダイツァン}」といふのは、兵仗を以て打ち殺すことを指すのでありますが、「イクサ」といふ言は、そつういふ意味のものでありません。

「イクサ」とは言靈で、その「イ」は射、出の意。「ク」は來の意。「サ」は狭霧^{サヤカリ}、裂^{サツ}などの意を含んだもので、この三音合成の言靈は「稜威^{レイイ}によりて鑿滅する神事」の義で「修理^{スヅメ}」といひ、「祓^{ハヒ}」といふと同義であります。

「ヒト」といふ個體に作用する術魂、化魂、曲魂の類を攘つて、その個體を清めて神の器にするのが「祓」で。「クニ」といふ「カミ」にまします全體(假りに全體と申します)に作用する術魂、化魂、曲魂の類を掃蕩し歸順させる神事が「イクサ」であります。「タタカヒ」は個人と個人、團體と團體、國家と國家といふが如き、個と個との對立から生ずる、生存の争ひであります。これを古典は、禍津毘の禍事と申して居ります。

「イクサ」は個を滅して全體に歸服統一すること、對立觀念を容れる餘地はありません。だから國と國との争ひを「イクサ」といふのは言の誤用で、「イクサ」を漢字で現はせば「膺懲の師」

といふのがまづ近いでせう。「クニ」あつての「イクサ」で「クニ」を知らぬ「モノ」には「イクサ」はありません。

「イクサ」は「クニ」だけの事で、「カミ」が「クニ」を潔めさせたまふて、高天原を御築成になる神事の義であります。「イクサ」は即ち全體のうちの祓でありますから、祓の三の神儀に應じて、イクサにも三の行事があるのです。その一は術魂の祓に當る神事としてのイクサ。二は化身魂の祓に當る火止を掃ふイクサ。三は曲魂の祓に當る禍津毘を滅ぼすイクサであります。第一の神事としてのイクサに就て、古典の傳へのうち最も解り易いのは、次の譚です。

伊邪那岐大神が小戸の檜原で禊ぎ祓ひまして、天照大神、素盞鳴命、月讀命の三柱の神を生みたまふて。天照大神には高天原を、月讀命には夜之食園を、素盞鳴命には海原を、それ々御統治なさるやう詔りされたのであります。素盞鳴命は一向その通りなさらないので、悪神が跳梁して騷擾を極め、妖怪が跋扈するといふ混亂状態に陥つたため。伊邪那岐大神は大そうお忿りになつて、素盞鳴命を高天原から神逐ひに放逐されました。その時素盞鳴命は天照大神の御許に、御暇乞ひにお出になりましたところ、暴風地震一時に起るといふ異變が生じました。(以上の譚

には秘義があるのですが、こゝにはその解説は致しませぬ)

天照大神はこれ必ず素盞鳴命に奪略の異心あるものと御思召し、直ちに御髪を解き御鬘に纏かして、左右の御鬘にも御鬘にも、左吉の御手にもみな八尺の勾魂の五百津の御統珠を纏ぎ持ちたまひ、背には千人入の鞆を負ひ、五百入の鞆をつけ、また稜威の竹鞆を取り佩き、弓腹振り立て、(これみな敵に對する神の武装を意味するものであります)、堅庭には向股に踏みなづみ、沫雪なす蹴散して(俗に申す、武者振ひ)稜威の男健踏み健びて、詰問なさつた。(これが言靈の威力を發揮する伊吹、雄詰、雄噴の神事で、後世武道の氣合ひ、掛け聲、今日の突撃はその一部です)

ところが、素盞鳴命はそれに壓倒されて、平伏して異心なきことを告白して、許されたといふのです。

これが神事としてのイクサで、武装して言靈の威力を發揮し、敢て刃に血ぬらずして、異心を摧き混亂状態を鎮定靖平するのです。祖神が術魂の祓と教へたまふのは即ちこの神事に當るのです。そこでこの鎮定靖平することを「言向け平す」と申されて居ります。「イクサ」の本義は、

言靈の威力の發揮で、言は神コトバカミですから、「カミ」の稜威が完全に顯現したときは、天下は自ら平安になることを、祖神は教へたまふたのであります。これは高天原の神儀行事で、そのまゝ地上の世界には行はれ難いので、祖神はまたそれに應じて教へたまふたのが、天孫御降臨の時の御教へであります。

五、火止を祓ふ「イクサ」

「火止」とは、その根本魂への歸結を失つた亡靈迷魂、即ち支那人のいふ「鬼」が更らに肉體を取つて、顯現した轉生人の事であります。この轉生人は「イノチ」を我ものと思ひ込んでゐながら、生存の欲望が強烈で、我執が熾なのです。これがあると地上は混亂紛糾し、必然靖平ではありませぬ。

天照大神が、皇孫天津彦々火瓊々杵尊を立て、葦原中國の主となさんと思召したときに、この地上には螢火の光く神（妖火の塊にして、即ち火止）だの蠅聲ハエノエなす邪神（生存競争に亂闘する口舌の徒）有り、また草木に至るまで、彼此れと抗爭する（今日の新聞雜誌ラヂオの如きは、草や木の變形なる紙にインキを塗つたものか、金石の變化で、草木成な言語すとはこの類であります）

といふ状態であつたので、高皇產靈尊は八十諸神を召集して、誰を遣はしたらこの葦原中國の邪鬼共を撥ひ平定することが出来ようかと、御相談の結果先づ天穗日命を天降しになつたのです。

この神は地の首魁たる大國主神に倂り媚びて、三年経つても御復命になりませぬ。そこで高皇產靈尊は更に諸神と御協議の上、天稚彦を御遣はしになりましたが、これも亦地上で下照姫を娶つて腰を落付けて、八年になるまで天上に復命されぬ。三度目には經津主神フツヌシと建御雷之男神タケノミカヅチノカミとを天降したまふのです。この二神は先づ大國主神とその子事代主神コトシロヌシとに歸順を勸告されました。ところが大國主神の子建御名方神タケノミナカタノカミが、その力を恃んで戰を挑んで來ました。しかし建御名方神は天神にはかなわす逃げ出したので、終に信濃の國洲羽の海（今の諏訪湖）まで追ひつめて、まさに殺さうとしたまふたところが、建御名方神はこの地から他へは決して参りませぬから、いのちばかりは御助け下さいと、哀訴嘆願するので、天神はこれを免して其處に居らしめられたのが、諏訪神社の縁起であります。

それから二神は出雲に引返して來て、大國主神に向つて、汝が二人の子は降服してこの國を獻上したが、汝は如何にと問はれた處が、大國主神の曰く、二人の子供が申上げた通り、この葦原中國を天神に獻上することに自分は異存はござりませぬ。唯だ願くば、天神同様の宮殿を造つて

頂いて、御優遇を賜るならば、自分の子供百八十神は八重事代主神を宰領として、一同天神の御用を奉仕致しませうと申しました。そこで出雲國の多藝志の小濱に天の御舎を造營して、大國主神をそれに住ませ、櫛八玉神を膳夫即ち接伴係長としてお置きになりました。これが出雲大社の起りであります。建御名方神はこの旨天上に御復命になり、これで葦原中國は平定して、天孫御降臨の準備は完了したのであります。

この諏訪神社とは、所謂國社の嚆矢であります。これを大三輪神社の場合（大己貴命即ち大國主神が自らの上に作用して、國土を經營せしめられた、幸魂、奇魂、術魂神なる天神の靈力を自ら祀られたもの）と較べると、そこに著しい意義の相違があることが判ります。諏訪神社及び出雲大社は、天神に歸順した國神とその子孫の定住所で、今日の言葉で解釋すれば、歸順者の收容所とも思われます。そこに天神が地上の火止に對するイクサの深き御旨が拜察されます。即ち徹底的に撃破膺懲し、敵が降参したときは、優遇してその面目を保たしめ、天神に準じて永遠にその生活を安定せしめらるゝのであります。

六、禍津毘を滅ぼす「イクサ」

禍津毘とは即ち曲魂で、邪神、奸鬼、諸魂とも申します。これが地上に現はれた状態を支那人は魄といひ、又た移屍、走影（即ち行動するシカバネ）などと呼ぶ、それです。これは「物」の結晶で、個人主義、自由主義、民主主義、唯物史觀などといふのは、この屍が發する邪思魔言で、所有慾、領土慾（即ち團體的所有慾）、文化などといふのは、これ等の屍の動作であります。これがために、天津日嗣の治ろしめたまふべき、玉臈内國なるこの地球上を混亂状態に陥れつゝあるのです。

これを討滅して地上の高天原を築成さるゝことが祖神の神旨で、神武天皇の中國御平定の「ミイクサ」は即ちこれを教へられたものであります。

古典の傳へによれば、皇師膽駒山を越えて大和に入らんとしたまひし時、長髓彦軍を興して待ち向ひ戦ひ、皇軍利あらず、皇兄五瀬命は賊の矢にありて神殞去りましたるにより、皇師は路を轉じて熊野邑に出でたまふ。こゝに悪神毒氣を吐き、皇軍悉く毒氣にあたり進退きわまる、時に此邑に在りし高倉下命夢に、天照大神が建御雷神（即ち鹿島神宮の祭神）を召して葦原中國は甚だ喧擾して皇孫たち頗る難澁の様子なり、汝往て賊を討てよと仰せられたるに、建御雷神は自

分が行かずとも平國之劍を下さば、則ち自ら平定すべければ、それを高倉下が倉の屋根を穿ちて、そこから墮し入れんと答へられて、高倉下に對して、布都御魂といふ子が劍を今汝の倉の中に置く故、これを天孫に献上せよと、仰せられたとみて夢が寤めた。翌朝夢の教に依て、倉を開けて見ると、果して倉の床板に一つの神劍が突立て居たので、それを取つて神武天皇に獻つたところが。天皇はあゝ長寢したものだと思はれてお起きになり、中毒した士卒も悉く起き上つた（この布都御魂の神劍は今日尙石上神宮に祀られて居ります。後世日本武尊の東夷征討にあたり、熱田神宮に奉仕せられし倭姫命が、天叢雲劍を尊に御授けになつたのも、この神旨によるものであります）

それから、皇軍は菟田の高倉山の方に進撃されたところ、前方には八十梟帥、兄磯城などの大軍が墨坂に煉炭を置き（日本武尊の焼津の難と思ひ合せて、怪火を以て拒むことは妖魔の常套手段で、そこに秘義があるので）、路を塞いで通りたまふべき處もないので、天皇は深く宸襟を惱ましたまひ、天神に御祈りになつたところが、天神夢を以て訓へて曰はく、天香山の社（山頂に在る祭壇）の土を取つて、天平瓮八十枚と嚴瓮とを造つて、天神地祇を敬ひ祭り、また嚴咒詛を爲よと。同時に臣下の弟猪も。天香山の埴を取りて、天平瓮を造つて天社國社の神をお祭り

になつて、後に虜を撃ちたまはゞ、則ち除ひ易からんと奏上した。その申す事と夢の御教とが一致するので、天皇は大そうお喜びになつて、直ちに弟猪と椎根津彦の二人に、天香山の社の土を取て來るようお命じになりました。二人は變装して敵の陣を通り抜けて天香山に登り、その頂上の土を取つて歸つて來た。直ちにその埴で平瓮と嚴瓮各八十枚を造らせて、丹生の川上なる鳥見山で（後に中國平定の御報告祭が行はれたところ）、其處の眞榮木を根こじに抜き、神招の神座を設け、供饌を炊いて平瓮嚴瓮に盛り、天地の神を御親祭になり、「イツノカジリ」をなし、御自らもその供饌を召し上り、士卒たちにもこれを頒ち與へ給ふた。これによつて皇軍の士氣大に振ひ、八十梟帥を國見山に破つて之を斬り、更に墨坂を越えて、梟帥兄磯城等を斬りたまふた。（梟帥、古典はこれを「ヒトコノカミ」と訓ます。日本書紀には、「潜カニ天香山ノ埴土ヲ取りテ以テ八十平瓮ヲ造リテ躬自ラ齋戒シテ諸神ヲ祭リタマフ。遂ニ區宇ヲ安定スルコトヲ得タマウ」とあり。又神功皇后三韓征伐の時、この秘神事をなされて、あのような戦果を收められたことが、古典に見えて居ります。この秘神事はそれ以來絶へて居るように思はれますが、御祭の供饌を士卒に頒ち與へたまふた行事は、今日各神社の御供物頒布としてその形式を存し、又た戦役等に際し皇軍に御菓子、御酒、御煙草などを御下賜になるのは、常に物を頂くのではなく、これに依つ

て大稜威に浴し、無限の神徳を蒙る有り難き神儀であります。さればこそ一つの御菓子、一本の御煙草に依て士氣大に振ふのであります。

最後に長髓彦と對陣なされたが、賊の勢強くして皇軍は敗戦に次ぐに敗戦といふ惨めな有様であつた。時に忽然金色の鵞が空から舞ひ降つて天皇の御弓の弭に止まり、まるで電のような靈光を放つて賊軍の兵卒共はみな眩惑して戦ふことが出来ぬ。そこで皇軍は之に乗じて攻め立てた、ところが長髓彦は軍使を遣はして、吾は天神饒速日命を君として仕へ奉る者である、夫れ天神に二通りある筈はない。そちらが天孫と仰せられるのはどうも信じ難い、或は天孫と稱して人の領地を奪はんとするものだろうと抗議した。(今日世界列國が口實とする正義人道だの、權益、勢力範圍だのといふのは、この長髓彦的迷想で、この迷想から、神命により四海の主たる日本を侵略國呼ばはりするので)

そこで、神武天皇は正統の天孫におはしますことの天表^{アマツミシルシ}を御示しになりました。長髓彦は之を見て内心恐懼したが、既に戦端を開いて途中でやめることが出来ず、騎虎の勢でその非行を改める決心がつかなかつた。(この間の妖魔の心理を古典は實によく説いてゐます) こういう風に長髓彦の性質が、いこちで、頑迷不靈で、天神と人(即ち行屍)との分際を如何に教へても到

底辯別理解し得ないので、終に長髓彦を殺されました。(一書には、長髓彦の主君たる宇麻志麻治命が、長髓彦を殺して皇軍に歸順されたとあります)これで中國は平定しました。天皇は詔して曰はく「我が皇祖ノ靈天ヨリ降り鑒ミテ 朕ガ躬ヲ光シ助ケタマヘリ、今諸ノ虜己ニ平ギ海内ニ事無シ、以テ天神ヲ郊祀リテ大孝ヲ申フヘキナリ」とて、靈時^{マツリトキ}を丹生の川上なる鳥見の山中に立て、皇祖天神を御親祭になりました。祭に始まり、祭に終る、こゝに聖戰の眞義を拜し奉るのであります。

七、劍と火と土

以上の神武天皇の「ミイクサ」を、前の二種の「イクサ」と對照しますと、そこに著しい相違が認められるのであります。第一の神事としての「イクサ」では、専ら伊吹^{イブキ}、雄詰^{オウケヒ}、雄噴^{オウノヒ}といふ言靈の威力により、相手を摧破改心せしめ。第二の火止^{ヒト}を掃ふ「イクサ」では劍と言靈とによりて、火止を徹底的に征服し、敢て殺すことなく、一旦歸順したときは、天神同様に御優遇されました。第三の禍津昆を滅ぼす「イクサ」では、徹頭徹尾天神の御教を奉戴して、神靈の發動によつて、劍と火と土とを以て奸鬼を鑿滅して假借する處がないことで、これが實に尊い祖神の御教

であります。

苟も皇師に刃向ふ者は、假令人間の皮を被つてゐても悉く邪神、奸鬼の類です。これを第二の場合と混同してはなりません。今地上には梟帥や長髓彦の徒が跋扈して居ります。正義人道の假面を被り、口に領土保全、權益擁護などと詭辯を弄するのは妖魔の常態です。この妖魔の術策に陥ることなく、斷々乎としてこれを殲滅することは、祖神の御旨であります。それまでは決して手を弛めてはなりません。これ等が殲滅されて、天下は甫めて平定され、八紘一字の實が擧がるのであります。

布都御魂とは、一口の神劍であります。たゞそれだけのものではありません。それは神の御魂で、布都といふ言葉に重大な意義があるのです。「フツ」の「フ」は二、經で推移を意味し。「ツ」は津、突で、突出を意味し。この二音合成の「フツ」なる言葉は、突いて突きまくるの義で、布都御魂、これを今日の言葉で申すと「攻撃精神」であります。

神武天皇の御軍が長髓彦の軍に敗けて、路を轉じて熊野邑に入り、天皇も士卒もみな毒氣にあつたとあるのは、強敵に出會ひそれを避けて、全軍の士氣沮喪したことを意味するものです。

その時建御雷神が布都御魂なる神劍を天降されたといふのは、古典の書き方の常として物に擬へたもので、天神が攻撃精神を附與されたといふことです。これが皇軍の特質で、これに依てはじめて天業は成就するのであります。

又た「火」とは唯炊事などに用ゆる火の意ではなく、物を焼きつくし一切を空無に歸せしめて混沌醜惡なる地上を淨化する神的妙用の義であります。今日の言葉で申せば、火砲、銃器、彈藥、爆彈等一切の兵器を意味するものです。兵は凶器なりといふは、持つべからざる者が持つからの事で、兵器こそは祖神が神劍を以て教へたまふが如く、正しく神器であります。故に兵器を手にする者は、神器を捧持する者ですから、當然その神聖を保持しなければなりません。

更に「土」とは、大地の生産力を意味したもので、物資といふことでもあります。土で平瓮、嚴瓮といふ祭器を作らるゝとは、一切の物資を先づ神の御用に供し奉るの義で、その神事たる嚴咒には容易に漏らすべからざる秘義が存するのであります。その物資を火を以て糧を作らしめられて、士卒に頒たれとは、物資を淨めて軍用に充つることを教へたまふものであります。今日謂ふ所の國家總動員より一步を進めて、全世界の資源の統制管理とでもいふべきものであります。攻撃精神と兵器及び資源、この三つのが統合して始めて、皇軍はその本來の使命を完うす

べきことを教へられてあります。西郷隆盛が、明治維新を以て、神武天皇中國御平定の先蹤に則
らせたまふよう奏請して、明治天皇の御嘉納を得たのも、亦この點にあつたのです。明治五年の
征韓の議もまた維新の大業の當然の道程であつたのですが、この天地の公道を認識し得なかつた
人たちに阻まれて、明治維新の天業はこゝで停頓してしまつたのです。

餘談に涉りますが、明治維新の天業停頓の経緯を少しく申上げて見たいと思ひます。

明治維新の御親政になつて、その旨を朝鮮國に通知されたところが、彼の態度は頗る無禮で、
恰も神武天皇に對する長髓彦の如き有様であつたので、參議兼近衛都督元帥陸軍大將西郷隆盛は
彼を説得してその態度を改めしむべく、先づ特派大使として單身朝鮮に赴き、それでも尙彼が態
度を改めず或は大使に危害を加ふるようなことがあつたら、征討の軍を起さるゝことに廟議一決
し、明治五年八月十七日御親裁を得、西郷隆盛に御派遣の勅命が降下したのです。(その裏面に
はずつと前から充分の調査準備が出来てゐて、決して無謀の舉ではなかつたのです)

丁度その時、岩倉具視等の歐米派遣使節の一行が、西洋の物質文明に肝をつぶして歸朝し、日
本を單に一國家として、内部の統制と物的開發を計ることを急務なりとする見解から之に反對し

(その裏面には嫉妬排外が含まれてゐたのです) 百方術策を弄し、既に御勅許になつて居る遣韓
使節の議を、御取止めになることにしてしまつたのです。その蔭に在つて専ら御取止め運動をし
た策士は、當時新智識の隨一を以て任じた少壯政治家伊藤博文等であつたことはかくれもない事
實です。それがために西南の役は起り、可惜人材は兄弟鬩に闔いで没し。次で明治十七年には、
京城に暴動が起つて日本公使館は焼かれ。廿七年には支那は朝鮮をその屬領なりとして、日本人
を排斥したので終に日清の役となり。折角得た大陸への發展足溜たる遼東半島は、露、佛、獨三
國の干涉に依て、全國民悲憤の裡に挽ぎ取られてしまいました。次で三十三年には北清事變が勃
發し、それを機會に露國は滿洲に居据つて動かす、漸次その魔手を朝鮮に伸ばし、國王をその京
城の公使館につれ込んで幽閉して、國王の名に於て實際は露國公使が朝鮮を統治し、その海軍は
鎮海灣を根據として對馬海峡の制海權を收めんとし、日本の運命は正に累卵の危に瀕してゐたの
です。(私も明治卅五年の夏、一學生の身を以て朝鮮沿岸を旅行して、鎮海灣も見て來ましたが
當時朝鮮に於ける日本人の狀態は、實に惨じめなものでした。)

そこで、それまで國內にばかり氣を取られてゐた日本人は、火の手が廂に及んで始めて目を覺
まし、狼狽し出して對外硬、暴露膺懲の輿論が勃然として起つたのです。その時日本の政治の牛

耳を執つてゐた伊藤博文は露國に交渉して、平壤以北に撤退して貰つて、大同江を以て日露の國境線とするの議を主張したのです。(どうでせう、この議が當時行はれてゐたら、今頃日本はどうなつてゐますか)輿論と軍首腦者は之に反對し、終に征露の役となつて、あの通りの成果を収め得たのです。その後の事は世間の記憶に新たなところですから申述べる必要はありません。

日露戦役後四年、滿洲に關し露國と新に協定するため、明治四十二年に伊藤博文公は大連を経て哈爾濱に向はれたとき、當時大阪商船會社に勤めてゐた私の叔父大河平武二翁が、會社から社長代理として伊藤公の接伴役を命ぜられ、神戸から大連まで鐵嶺丸に同船、航海中一夜海が荒れて公の隨行員はみな船暈し船室に引籠つてしまつて、船に強い伊藤公と私の叔父と唯二人喫煙室に残されて懇談したときの事、公は私の叔父から西南の役でその姉二人は寡婦となり、兄二人は戦死傷し(長兄は植木の激戦で戦死し、次兄は延岡で腿に盲貫銃鎗を受けて捕虜となりましたこれが私の父です)家は官軍のために略奪放火され、ために一家没落したことなどを聞かれて。黯然として鹿兒島の人を定めしこの伊藤を恨んでゐるだらうが、征韓論の経緯、西南の役勃發の事情は實は斯うだと、事細かに當時の裏面を説き釋明これつとめ、今にして願れば、西郷は先見の明があつた。日清、日露兩役の勝利も西郷が自分と子弟とを犠牲に供して、百姓兵を實地訓練

して呉れたことに負ふものが頗る大である。實に西郷の偉さがしみじみわかつて來たと、長嘆息されたといふことを、當時大連に居た私は叔父から聞きました。(この叔父も間もなく世を去つたので、伊藤公の談話の内容を詳細知つて居る者は、大久保利武侯と私の外にはありません)この話を聞いた私は、伊藤公に會つて見たくなつて、この叔父の紹介で遼東ホテルに於て伊藤公に面談の機會を得て。問はるゝまゝに私の大陸經營策を陳述したりしましたが、それから三日の後、公は哈爾濱驛頭に朝鮮人の魔手に仆れたのでした。思へば公が私の叔父に述懐された事は「人の將に死なんとするやその言良し」で、彼の詐らざる最後の告白だったのでせう。伊藤公が言つたような意味に於て、西郷隆盛といふ個人が偉らかつたものではありませぬ。西郷といふ人は、「生死は何ぞ疑はん天の附與なるを」と告白したことに依てもわかるように「直日ナホヒの人」です。神の器です。この神器に布都御魂がお宿りになつて、日本の眞使命を御遂行にならうとしたまでの事です。

八、「モノノフ」

「イクサ」に奉仕する者を「モノノフ」と申し、後世では武夫、武士などと書きますが、古典に

は「物乃負」又は「物部」といふ漢字が充てゝあります。この「モノノフ」の「モノ」は物即ち鬼（萬葉集の古歌には鬼を母能と訓んで居ることは前にも述べた通りです）、「フ」は経で、推移の意ですから、鬼であつたのが歸順した義で、曲魂を根本魂とする火止も日の神に歸順しまつるときは、「日止」となることを教へられたものであることは、次の舊事本紀の宇麻志麻治命に關する譚で判明します。

天照大神が「豊葦原千秋長五百秋長ノ瑞穂ノ國ハ吾ガ御子正哉吾勝速日天押穗耳尊ノ知ラサム國ナリ」と詔り賜ふて、天押穗耳尊を天降したまふ時に、この尊と高皇產靈尊の兒思兼神の妹萬旛豐秋津師姬栲幡千姬命との間に御誕生になつたのが、天照國照彦天火明櫛玉饒速日尊で、（いづれも大そう長い神名ですがこれは神言靈で、これを解けば自らその間の事が判るのです）天押穗耳尊は天照大神に、先づこの御子を天降したまふべきよう奏上されて、御許をうけられたのです。時に祖神は饒速日尊に天璽瑞寶十種と、起死回生の靈力ある布瑠の言靈とを御授けになり、葦原中國に行かれてもし敵對する者があつた時は、能く方便を爲し、誘へ欺き防拒ぎて治め平げよと仰せられて、三十二柱の護衛の神々を始め多勢の神たちを供奉せしめて、天降し給ふたのです。

饒速日尊は祖神の詔をうけて、天磐船に乗つて、河内國河上の峰に天降りまして、長髓彦の妹御炊屋姫を娶つて妃となし、御生ませになつたのが、宇麻志麻治命です。饒速日尊は其處で神殞去りまして、その御屍は天上に引取られたまふたのです。この宇麻志麻治命を主君と仰ぎ、地上を我物顔に横行跋扈したのが長髓彦で、これが後に神武天皇に反抗して皇軍を惱ましたのです。その結果は既に述べた通りで、どうしても天人の際を辯別しないので、宇麻志麻治命はその俱戾を惡み、長髓彦を誅して、部下を率ゐて神武天皇に御歸順になりました。天皇はいたく命の忠節を嘉みせられて、さきに天神より授けられた布都御魂の神劍を御授けになりました。また命は天皇に、命の御親饒速日尊が祖神から授けられた天璽瑞寶十種を献上せられたので、天皇は殊の外御喜びになり、命を特に御寵遇になりました。また命はその部下を率ゐて、所在の賊徒を討伐し海内を平定して奏上されました。やがて神武天皇が橿原宮に御即位の大禮を擧げさせたまふ時、宇麻志麻治命は布都御魂の神劍を捧持して、御警衛の任にあたり又た先きに献上された天璽瑞寶を以て、天皇と皇后との御爲めに鎮魂祭を奉仕されましたので、天皇益々御寵愛したまひ、近衛軍の總帥に任じ「足尼」（後の宿禰で元老の義）の稱號を賜りました。翌年中國平定の論功行

賞にあたり、宇麻志麻治命を殊勳第一とし、「股肱」の職に配し、その拔群の功績を永久に傳へんため、子々代々國家守護の大任を命ぜられ、併せて「食國大夫」(即ち太政大臣)に任ぜられました。この宇麻志麻治命が「物部」の祖先であります。(島根縣安濃郡川合村に在る官幣小社物部神社は宇麻志麻治命を祭神とす)

この御教に示された通り、その以前の身分、境遇、教養は、どうであらうと、一度、陛下の軍人として召されたときは、今迄私有物扱にして來た身命は淨化されて、一切の社會的差別を超越して均しく、陛下の股肱となり、一旦緩急あつて「ミイクサ」に従ひ、日の神の御旗の下に身魂を産土神に奉還したときは、その「イノチ」は神歸りに歸つて、永遠無窮の「イノチ」に入り祖神に合體するのであります。これは日本^{オホヤマトスメラミコト}天皇の皇軍に従ひまつる者のみが有つ、人類最高の榮譽であります。

平和と「ムスビ」

一、間違つた平和思想

世間では普通、戦争の反対即ち戦争しない状態——武器を以て直接に人を殺傷しないだけのこと——を「平和」と呼んでゐます。武器以外の機械で、他人の血を搾つて斃死したり、働き場を奪つて餓死したり、悪思想に感染させて悶死したりしても、それでも平和だといふのです。英語の Peace 「ピース」といふ語を、日本では「平和」と譯してゐますが「ピース」の本來の意味は、安心とか、沈黙といふ義で、それは「平」であつても、「和」ではありませぬ。支那の詞に「物平かならざれば必ず鳴る」とか、「不幸を鳴らす」などと申して、ぐうの音も出ない死の沈黙状態を「平」といふので、英語の「ピース」はそれにあてはまるのです。

然るに、「和」といふ字は、禾と口から成つた形聲指事で、「禾」は穀物の毛即ち「のげ」で、(日本語で禾をノギ偏といふのは「のげ」の訛つたのです)心の思ひの口に出でたるを「和」と

いふのであります。(周禮には樂に従ふ、注に八音の克く諧ふ是れなりとあります)「中庸」には「喜怒哀樂ノ未ダ發セザルヲ中ト謂ヒ、其ノ發シテ皆節ニ中ルヲ和トイフ。中ナル者ハ天下ノ大本也、和ナル者ハ天下ノ達道也、中和ヲ致シテ天地位シ、萬物育ス」と申して、和とは死の沈黙を破つて、喜怒哀樂の情が口に表現され、しかもそれがよく他との調子が合つてゐる即ち調和してゐること、平の如く口にしたいとも言へないで、止むを得ず泣き寝入りになつて居る、死の沈黙の義ではありません。故に死の沈黙を意味する英語の「ピース」には、和はないのです。

英米人が「ピース」といふのは、自分達は奪ふだけの土地は奪つた、掠められるだけの物は掠め取つた、最早腹一ぱいで「安心」だ、不平をいふ事はない、これから枕を高うして安眠するのだ、さあ餓鬼共沈黙を守れ、沈黙しないと沈黙させてやるぞといふ意味です。それとも知らずに、この鬼の念佛に瞞まされて、平和會議などと稱して、遙々歐羅巴くんだりまで呼びつけられ、手前勝手なお談議を聴かされて、よくその眞意を呑み込めもせず引さがつて来て、半可通な平和論を振り舞はす高様者が、日本にも明治以後には随分跋扈したものです。

この平和論といふものは、キリスト教の專賣特許で、彼等がこの特許を獲るまでには、随分人を殺し、又たこの特許を保持するために、今でも盛に人を殺して居るといふ、随分不思議なもの

ですからその眞相を暴露して見たいと思ひます。

それには、キリスト教の成りたちから、その母體たるユダヤ教にまで遡つて、その正體を洗つて見る必要があるのです。

二、ユダヤ人と平和

明治の末期以後の日本では、キリスト教は常識化し、クリスマスは年中行事の一つとなつて居りますが、扱てキリスト教とは何かと質ねて見ると、キリストといふ西洋の聖人の教で、これに依て西洋は今日の富強を致し、燦然たる文化生活を築き上げたもの、博愛慈善を勧める世界平和の鍵、戀愛の自由を公認するものだ位のところです。東京の近所にも、何聖殿とかいふものなどがあつて、釋迦、孔子、ソクラテースなどと一緒に、キリストを祀つて、詩吟の會などをして、それで國民精神の作興とかをして居るので、世間一般がそう思ふのも無理はありませんが、キリスト教とは果してそういふものでせうか。

キリスト教は、回々教即ちマホメット教と共に、ユダヤ教から相前後して生れた、極めて仲の

悪い兄弟なのです。その生みの母なるユダヤ教は、今日世界中で鼻つまみにされて、ナチスからは追はれ、ファシストからは蹴られて居ますが、英、米、佛の金権を一手に握み、これ等の國の大新聞を支配して輿論を製造し、ソビエツト・ロシアの主權を掌握してゐるあのユダヤ人の宗教です。

このユダヤ人位、得體の知れぬ人種はありますまい。彼等の經典である舊約聖書の記す處では、大そう勿體らしい來歴を有つてゐるようですが、あれは實をいふと、半分以上は夢物語で、史實ではありません。彼等は夢を神聖視してゐましたから、夢物語は即ち神の御告げと信じて來たのです。ギリシアあたりの古代歴史家の書いたものや、最近に發掘された四千年前の古代パピロニアの圖書館の藏書（書といつても、今日のような紙に印刷したものではなく、瓦に刻み込まれたものです）などから推測しますと、西洋紀元の四千年位前に、アラビア砂漠の周圍に彷徨してゐた遊牧民を、モーセといふ巫祝が統一して、その統制原理として、遊牧民一般の信仰對象であつた「ヤアウエ」亦の名は「ヤハ」（聖書に「エホバ」とあるものです）を興へたのです。この「ヤハ」とは元々「ヤマ」と呼ばれた、西部亞細亞の今のベルシヤあたりの神で、それが東に行つて印度では「閻魔エンマ」と訛まれ、西に傳つてアラビヤ地方では「ヤハ」と呼ばれた、「火の神」

です。（宗教學者はこれに拜火教などの名稱を附して居ります）

この火の神を奉じて、到る處放火掠奪を行つて、追々に集團を強化増大して、今日のパレスチナ地方に侵入し、先住者を焼き拂ひ、其處に居直つて十二支族から成る組合を作つたのが、即ちイスラエル民族なるものです。（有名なお伽噺、ナイル河畔に於けるモーセの譚だの、モーセが興へたといふ十誡などといふものは、ユダヤ人がパピロニアで經典製造の際、パピロニアのハムラビー大王に就ての史實を燒直して、借用したものであることは、最近にその種が明かされたので、モーセが實在の人物であつたか否かも、疑はれて居ります）

かういふ風で、もと／＼火の神の周圍に集つた夏の虫のような連中ですから、その民族組合なるものはうまく纏る筈はありません。そこでこの組合員中の一員であつた一支族ユダヤから、ダビデのソロモンだといふ英雄が出て、組合の統一強化の方便として、武力を以て四方を征服し、金銀財寶穀畜を掻き集め、エルサレムの自分の邸に一大神社を建設しました。（このダビデ、ソロモンの榮華譚は、ユダヤ人は勿論、回教徒にも西洋人一般にも頭の奥底深く浸み込んで、潜在意識と化してゐるもので、彼等は不知不識の間にこれに支配され、國家、世界の統一には、武力侵略、金銀財貨の集中、宗教といふのが當然の事として居るので）

このエルサレム神殿は、その内部を天井から壁から床まで、すべて純金の延べ板で張るといふ、東西古今無比の豪華振りを發揮したものです。京都の金閣寺をかれこれ申しますが、あれとは太西洋航路の八萬噸の客船と、支那戎克くらの違ひです。この神殿に用ゐられた金は、物好きな米國の學者の計算によると、今日の價格にして約十億弗、全體の工事費は二十三億弗位になるといふ事です。日本の通貨に換算すると七十五億圓以上になります。この文字通りの金殿の魅力に引つけられて、山を越へ谷を渡つて、あちらこちらから羊飼ひ共が、參詣に集つて來るようになりました。その結果ユダヤ教には、拜火教に拜金宗といふ一要素が加はることになつたのです。同時に、由來掠奪を本業とする周圍のアラビヤ民族から、始終狙はれて、屢々強奪され、終に、今日のイラク地方に起つた東洋民族のバビロニア帝國のために滅され、國王始めユダヤの全知識階級は、ユウフラテ河畔に拉致されて、捕虜生活を送ること七十年に及びました。その時ユダヤの下層民は或は四方に離散し、或は奴隸にされてしまつたのです。

ユダヤの上流階級がバビロニアで、捕虜生活中に東洋の學問を學んで、茲はじめて民族意識が確立し、自分達の先祖の歴史を書いたのが、舊約聖書の初めの部分の六書で、その時自己民族統制のために編纂したのが、所謂律法書なるものであります。あとの残りの預言書といふもの

は、すつと後に附け加へられたもので、今日の如きユダヤ教經典即ち舊約聖書が出来上つたのは、西洋紀元後九〇年ジャムニアで開かれた、宗門總會の結果です。

バビロニア帝國が滅亡して、續いてベルシヤ帝國になつてから、ユダヤ人は捕虜生活から開放されて歸國したのですが、それも東の間で、又もやギリシアのアレキサンダー大王に征服されて、(東洋人が西洋人に征服されたのは、これが始めです)、極端な同化政策を強制され、ユダヤ人はその固有の生活様式から、國語までも失つて、全然ギリシアの植民地になつてしまつたのです。この間にユダヤ人の一部に起つた信仰が(預言者即ち神懸りによる信仰)「ユダヤ人は天地唯一の神エホバの特に選び給ふた人民で、今にエホバはその選民を救はんがために、メシヤ(救主の義)を御遣はしになつて、ユダヤ人以外のものはみな滅ぼして、全世界はユダヤ人のものになる」といふ、極めて虫のよい獨斷的なものです。(宗教學者がメシヤ思想と呼ぶのはこれをいふのです)四五百年の間盪廻しに他民族から壓迫窘縮されつゞけて來て、極端に歪んだ前科者のような民族には、それでも考へなければ、生きて行く瀬はなかつたのです。この信念が段々ユダヤ人の間に、廣まり深まつて行つて、終に牢固たる民族的信仰になつてしまつたのです。それから暫らくして、ギリシアは衰へて、ローマ帝國が起り、ユダヤは又その領地に編入され

ましたが、どうも片意地で、ひねくれた民族なので、ローマ政府も散々手古摺つて、紀元後七十年ローマは終に、ユダヤの都バレスチナを焼打ちにし、百萬からのユダヤ人を殺してしまつて、茲にユダヤ人は永久に、地上の定住所を失つたのです。その時田舎に居て生き残つた者や、以前から國外に流浪してゐた連中は、その郷里を失つたので、爾來千九百年の間、世界到る處で商賣と金貸しとを主な職業として、生活をつゞけて來て、今にも「メシヤ」の降臨があるかと、エルサレムの廢墟にお詣りしては、壊れた石の壁にかじりついて、「メシヤ」の降臨を哀訴嘆願してゐるのです。この壁を「嘆きの壁」と名けて、今日エルサレムの一大名所になつてゐます。マルクスもレーニンも、スターリンも、アインシュタインもみなこのユダヤ人なのです。これ等のユダヤ人のいふ「平和」とは、「メシヤ」降臨の義で、それはユダヤ人以外は凡て滅ぼされて、ユダヤ人だけの世界になるといふ事です。

三、キリスト教の正體

このユダヤ人の待望の「メシヤ」と自ら名乗つて現はれたのが、耶蘇即ちイエス（イエスとはギリシア語で、ヘブル語即ちユダヤ本來の語のヨシユアに當るもので、「エボバ救ひ」即ち「救

ひ主といふ義）なる人物であります。このイエスが實在の人間であつたか、否やは千古解けざる謎です。

西洋の古代歴史家はみなイエスの實在を否定して居るのですが、キリスト教會内でその實在を主張する者の間に於ても、その生誕死亡の年月に就て種々の説が行はれ、其の最も古い年代説と最も新しいものとの間には、少くも百三十二年以上の差があり、又今日一般に信ぜられて居る、ローマ建國七五二年〇月五日説は、五二五年頃ヂオニシウス・エキジグウスなる者の推算によるもので、それすら第八世紀の終頃迄は、ローマ教會の承認を得なかつたのです。併しこれが後はローマ教會の定説となつて、この推算に本づきイエス生誕の年を以て紀元とすることになりました。（近頃の學者間では、イエスが生れたとしたらば紀元前四年だろうといふのが定説です）又たキリスト教の三大節たる、クリスマス、受苦日、復活祭のうち、クリスマスはずつと以前からローマその他で行はれてゐた、冬至の星祭りで、（支那の周時代の郊社の禮と同じものです）復活祭は春分の日即ちお彼岸會が、第八世紀頃教會の儀式として採用されたもので、共に天體崇拜から起つたもので、イエスとは無關係なものです。

今日の教會史家は、異端派として片付けて居りますが、初代キリスト教會内に絶大勢力を有つて、第十世紀頃までも繼續してゐた、マシーオン派の如きは、イエスは造物主の手から人々を救ふために善神より來り給ひ、物質的の肉身でなく、^{ファンタズム}幻像であつて、テベリオ帝の十五年に、カペナウンに天降つたものと主張し、従つて聖母マリヤだのといふ者は元より問題とはしてゐませんでした。

かういふ風ですから、ユダヤ人一般はそんな者は「メシヤ」ではないといふのです。唯だ極少數のユダヤ人丈が、「このイエスといふ人物が、神の獨り子として神から遣はされたメシヤで、全人類の罪を背負つてその身代りになつて、罪を贖つてやらうといつて、十字架につけられて死んだ。そして三日目に生き返つて天に昇り、又たやがて天から降つて來て、全人類を救つて下さるものだ」と信じたのが、所謂キリスト教です。(キリストとはギリシア語のキリストスで「王」といふ普通名詞で、特定の人を指したものではありません)

聖母マリヤをイエスの母として崇拜する信心は、紀元後二百年頃埃及のアレキサンドリアの切支丹のうちに、生め殖えよのイシス女神像を教會内に持ち込んで色々の願かけをする者が

あり、それが段々各地の切支丹のうちに流行したので、四三二年にこれを正式に承認しようとする派と、神に母はないとて反對する派とが大闘争の擧句、前者が多數決で勝つたため、終に私生母マリヤといふ者が認知され、爾來キリスト教の本流天主教の主神イエスは名のみで、實際はマリヤ教になつてしまつたのです。この時敗けたネストリウスの一派は分離して東方に移り、シリア教とか波斯教とか呼ばれ、それが唐の太宗の時支に那入つて、景教と稱することになつたのです。

ローマ帝國の統治下にある、一部ユダヤ人のイエスをキリスト即ち王なりとする信仰は、帝國の國是と相容れざるのみか、この信者になると國家的祭儀に參列することを拒否するといふ、非國民性を發揮するので、爾後三百年に亘つて大迫害を蒙り、その信者は文字通りみな地下に潛入して、執拗に細胞組織を擴大強化して行つたのです。(日本に於ける教徒の神社不參拜、國祭日不祝、國旗不掲などは、その淵源がこゝにあるのです。又當時ローマの墓場は地下に、^{カマコム}トンネル式になつてゐたので、ローマのキリスト教徒はこゝを連絡所兼禮拜堂としてゐたのです。後世の共産黨の運動方法は、みなこの初代キリスト教徒の經驗を採り入れたものです)

ローマ帝國内のゴール地方のカイザルであつたコンスタンチヌスが、西紀三一二年にイタリヤ

を領有するに及び、信教の自由と教會財産の還付を命じ、次で東部のカイザル、リシニアスと覇を争ふに際し、ローマ教會の司教始め信徒はこの時こそと、コンスタチヌスの軍に馳せ参じて大に力を效したので、戦勝てコンスタンチヌスの天下となるや、ローマ教會を公認してローマ帝國の國教としました。後ち間もなくコンスタンチヌスが、帝都をローマからビザンチオンに遷して、ローマは空巢になつたのを教會はこれを拾つて、教權と政權とを一手に握ることになつたのです。この教會の首長を教皇（俗にローマ法王といふ）と稱し、最初は「キリストの代表者」といふ振れ込みで、全教會に號令してゐたのですが、教皇インノセント第三世が西紀一二一五年に「主はペテロに全教會のみならず、全世界の統治を委ね給ふた、故にペテロの後繼者たる教皇は、地上に於ける神の代表者である」と宣言してからは、全世界はローマ教皇の統治下に在るものだといふのがキリスト教徒の堅き信念です。

このローマ教皇は、地上に於けるキリストの代表者で、神から天國と地獄との二つの鍵を預つて居るのだから、凡ての人の現世の罪を赦す權限と、死んでから天國に行くか地獄に墮ちるかかは、教皇の御恩召次第だといふのです。これは一切の國家的權力をも併せ握つての宣託ですから、西洋人はみなこれに怯えて、教皇に跪くようになりました。一旦教皇の御機嫌に逆ふと、一國の國

王の尊を以てしても、御詫びに参上しても御許しが出ないと、一晚中雪の中に立往生しなければならぬといふ、偉い權幕だつたのです。

こうなると、大臣宰相の地位に在る輩下の坊主共から、末輩に至るまでみな墮落してしまつたのです。何れの國、何れの時代でもそうですが、坊主が墮落すると化け物の正體を暴露して、大酒は呑む、博奕は打つ（今に寺錢といふ詞が残つて居ります）、妾は蓄える、善男善女を誑かして財産を巻き上げて、その金で質屋や高利貸を営む（今日でも佛蘭西で公設質屋のことを「モン・ド・ピエテ」と呼ぶのはその名残りです）、終には強盜殺人までする（西洋にはこの事實が多い）。これが段々昂進して、第十六世紀の初めには、免罪符といつて天國行きの切符の前賣までやりだしたので、生真面目な獨逸の田舎坊主マルチン・ルーテルや、巴里大學の學生ジャン・カルビンなどといふ、青年たちが死物狂ひになつて大に輿論を喚起したのです。獨逸や瑞西あたりの田舎者が、これに目をさまして、坊主共に反抗して、銘々勝手な教會を建てることになりました。これが西洋の所謂宗教改革（實はローマ教皇國の御家騒動）なるものであります。教皇朝廷では、この謀逆人共を「プロテスタント」（抗議者の義）と呼んだのです。今日日本でキリスト新教、支那で耶蘇教と呼んで居るのは、この連中の事です。教外の者はキリスト教といふとみな同じだ

らうと思つて居りますが、それは認識不足の致す處で、ローマ教皇側（即ち天主教會）では、今でも新派なる耶蘇教の連中を異端即ち外道扱ひにして、決して同席致しませぬ。

この「プロテスタント」の連中が、ローマ教皇の權勢を挫くために、擔ぎ出したのが「バイブル」即ち聖書です。元々この聖書といふものは、原本はギリシア語で書かれたものを、ラテン語に翻譯して卷き物に筆寫されたもので、その寫しが各教會に坊さん達のお説教の虎の巻としてあつたわけで、俗人は拜見することも出来なかつたのです。それをルーテルやカルビンが持出して、俗人にも讀めるように、獨逸語や佛蘭西語に翻譯して、丁度その頃發明された活版印刷に付して、世間に發表して、教皇始め坊さん達の言ふ事なす事が、主イエスの御旨に違ひ、教皇の權力の理由の無い事の責め道具に使ひ出しました。教皇側では玉座に火がついたので、慌てゝそれを消し止めるために、「聖書は教會の教義を傳へるために、教會が自ら編纂し保存したもので、之に正當解の解釋を與ふるものは、教會の首長たる教皇の教權にある」と布告しました。

教會史家の定説では、新約聖書なるものは、西紀百五十六年頃から、地中海沿岸の各地の「切支丹」の集會で、思ひ／＼のものが朗讀されてゐたもので、三百年頃までは今日のような纏つたも

のではなく、漸次ローマの教會が權力を得て、ローマ帝國內の各教會の首位を占め、ローマ教會の管長即ち教皇が、全キリスト教會に號令するに至つたとき、紀元三九七年カルケドンに全宗門會議を召集して、各教會の編纂物を取捨して、キリスト教の正經と認定したものであるといふのです。

又た有名な「宗教の起源及キリスト」（一九一四年出版）の著者ハンネーは、「新約聖書はローマ政府が其の奪つた廣大な領土に散在せる各民族を、無抵抗に統御する目的を以て、最も共通的な太陽神クリストス（クリストスといふギリシア語は、印度の太陽神クリシュナ佛陀の寫出だといふのです）を緯とし、ユダヤ教の經典を經として、學者に造らせたものである」と斷定して居ります。

そういふ新約聖書を、「其一言一句悉く聖慮の感動によりて成つたもので、絶對的權威を有する無二の經典と信認し、（即ち神の御旨は一切この聖書のうち丈けにあるといふのです）凡て聖書に明記せざる教義の如きは、不純のものとして排斥すると同時に、聖書を解釋する標準として、個人の良心（即ち聖靈）に訴ふるを至當するとす」といふ、聖書信仰がプロテスタント即ち耶蘇

教なるものです。

四、所謂平和主義の秘義

キリスト教の傳道者は、「キリストの在る處必ず平和を伴ふ、故に世界の全人類がキリストに歸依した時、始めてこの世界に眞の平和が来る」と申します。併し、言はせも果てず、否、否、否、否と歴史は極めて嚴肅に叫ぶのです。そして、歴史は諄々として、歐羅巴にキリスト教が公然布教されてから、正に千六百年。全歐洲が「キリストの代表者」を仰いでから、既に千年を経過して居るのに、その間にキリスト教徒が、武器を以て互に殺傷し合はなかつた日は、百年とは續いてゐない。その武器を手にしなかつた日は、彼等が疲れて休んでゐた時で、その休んでゐた時でも、彼等は武器以外の、鋤、天秤、ハンマー、はてはペンを以て、互に殺しあつて來た。キリスト教徒といふ奴は、よく／＼人殺しの好きな人間だといふのです。

又た最近、私共の生々しい經驗では、三億の所謂キリスト教徒が、敵味方に分れて、おまけに平生は侮蔑し切つてゐた、異教徒、未開人までも手傳ひに頼んで、四年の間殺し合つて、とう／＼一千万のキリスト教徒を片付けてしまつたではありませぬか。狂氣の沙汰と云はうか、我々

は唯啞然たらざるを得ませぬ。傳道者の言ふが如く、キリストの在る處必ず平和があるならば、歐羅巴には未だ會てキリストは居なかつたのでせうか。

政治家、學者、歴史家のような、存在の世界しか見得ない人生劇の看客は、歐洲大戰の原因に就て、國際勢力の均衡とか、膨脹するゲルマン民族の生存のための必然的要求とか、有てる國と有たざる國との利害の衝突とか、色々の觀察を下して居ります。それは全く舞臺面ばかり觀て居る皮相の見解に過ぎませぬ。一日のうちには晝と夜とがある、殊に歐羅巴は夜の方が長い、夜は惡魔の世界で、「歴史は夜作らる」といふならば、歐洲の歴史は惡魔が作り又た作りつゝあるものでせう。演劇には必ず脚本があります、脚本には作者がある筈です。その脚本と作者とを知らなければ、劇の眞味は鑑賞出来ませぬ。そこで私は、西洋殺人劇の脚本とその作者とを突きとめるべく、最近十年間西洋人の人生劇の脚本たる、キリスト教の教理を檢討し、その神學と教會史の研究に没頭して、始めてその謎が解けて來ました。それが次に述べる、キリスト教の所謂平和主義の秘義であります。

キリスト教の各派に通ずる根本教義では、凡ての人類は、その始祖アダム、エバが犯した原罪により、造物主から死刑の宣告を下されてゐるものである。現世はこの死刑囚が刑の執行を

待つ間の溜り所で、この死刑の宣告に服罪した者を收容する、公設刑務所を公教會といひ、その總所長を教皇と稱し、部下の刑吏を主教、司祭などと呼び、教誨師を宣教師といふ。又たこの公設刑務所以外に、勝手に服罪さして、押込めて置く檻獄部屋がある。公設側はこれを外道ゲドツ視する、この檻獄部屋の親方は監エビスコポ督と號し、その配下の獄卒プレジデントに長老、執事などの小頭があり、またこれに従屬した服罪勸誘員に、傳道師などといふがある。牧師とはこの檻獄部屋のうちの小部屋の番をする小頭のことである。

教徒とは囚徒といふことで、信者とは従順に死刑の宣告に服罪した者の義で、頑迷不靈にして未だ服罪しない者を未信者と呼ぶ。この服罪を肯じない没分曉漢を説諭して、服罪さすことを布教又は傳道といふ。服罪者を刑務所に收容し、又は檻獄部屋に檻禁して、酒を飲むな、煙草を吹ふな、道樂をするな、せつせと他人のために働けと、獄則を教へ又は強制して、刑の執行の時に安樂往生さしてやらうといふのが、所謂教役者（日本の法律にては宗教教師と稱す）の役目で、その監視小屋を教會堂といふのです。

全人類が人祖の犯した原罪と獄則違反の罪過とにより、この死刑の執行が全部終了したときがこの世の終りで、そこに始めて神の國が地上に顯現し、生前にその罪を承認して、順從に服

罪してゐた者、即ち教徒、信者は、その褒美として再び前生の肉體をとつて、生れ更はらされて、今度は死のない、無窮幸福の生活を永遠に樂むことが出来るといふのです。

以上の斷案を以て、キリスト教を誣うと思ふ方は、先づ日本で五十年來出版頒布されてゐる、新舊約聖書を熟讀し、次に天主教教會の祈禱書、公教要理、公教提要を始め、西洋人關係の耶蘇教諸派の文献を精細に檢閲して頂けば、私の申す事は、それ等から一步も埒外に出でゐないことがわかると思ひます。キリスト教の教師たちは、信者誘拐の都合上この教義をカムフラージュしたり、オブラードで包んで居るので、大抵の信者はこの真相を知らずに居るのです。然らば、どうして戦争が起るか。キリスト教はなぜ文化を建設し、又たこれを促進するか。教會はなぜ教育、救貧、病院などの社會事業を熱心に經營するかといふ反問が必ず起りませう。それはこうです。

既に宣告されてゐる死刑の公的執行前に、自分勝手に死ぬのは（即ち自殺、切腹）獄則に反する罪で、再生の恩寵を放棄することになるが、病氣、天災、地變による自然死、及び戦争による他殺は、神の全人類に對する死刑執行の、豫定行爲の一であるから差支ないといふのです。それ

故キリスト教の或教派などでは、洪水、地震、飢饉、戦争などが起ると、そら世の終りが来た、神の國が近いと、踊り騒ぐのです。聖書にもさういふ記事があります。さういふ信念から、キリスト教の教役者のうには、兎角戦争を教唆誘發する者があります。彼等に見れば、神の國建設のため、キリストに最も忠實な行爲なのです。この例は廣く世界史に求むるまでもなく、東洋を見ただけでも充分です。即ち日本の島原天草の亂は如何にして起りましたか。この前後通敵賣國の非國民は、ローマ教會では「福者」の稱號を受けて祀られてゐるではありませんか。又た最近百年間に支那で起つた、阿片戦争、長髮賊の亂、英佛聯合軍の天津攻撃、清佛戦争、北清事變、革命内亂、これ等の裏面に踊つて終に清朝を仆し、東洋の平和を搔亂した魔手は何であつたかを知るとき、何人も啞然たらざるを得ませぬ。

更に排日、侮日を教唆して、終に徹底懲罰の皇軍を誘致した者は何人ですか。孫逸仙も蔣介石夫妻も、洗禮堅信の禮を領した折紙付きのキリスト教徒で、彼等の配下には幾十萬の青年教徒が居るのです。彼等は死刑の宣告に服罪して、只管神の國を待望する囚人です。此等の死刑囚の行動を指導する者の何人であるかは、苟もキリスト教の教義を知る者には自ら明らです。

然らば、いづれ壊滅さるべき此世に、キリスト教は、なぜ文化を建設し、又たこれを促進する

かといふに、それは早晚死刑を執行さるべき囚人たちに、その執行の時を待つ間の氣紛れにさせて置くので、恰かも幼稚園の子供が砂場で、家や塔を造つたり、道路や橋を架けたりするような時間つぶしの遊戯に過ぎないといふのです。又た教育、衛生、救貧等のキリスト教會の經營する社會事業は、祭壇に献げらるゝ犠牲に、人工肥育を行つて立派なものにして、之を装ふに錦繡の衣を以てし。死刑執行前に死刑囚に、御馳走を饗し淨衣を着せて説教をする、あれに該當するもので、神の國への旅立ちの準備だといふのです。

イエスはいふ「われ地に平和を投ぜんために來れりと思ふな。平和にあらず、反つて劍を投ぜん爲に來れり。それ我が來れるは、人をその父より、娘をその母より、嫁をその姑嬢より、分たん爲めなり」と。(新約聖書馬太傳福音書)

五、支那人の理想の平和

支那人は元來個人主義の結晶ですから、唯一身一家、せいぜい親類縁者の範圍が、無事安穩で

あればそれでよいのです。假令高位高官に在つても、社會に及ぼす害毒などは一向顧みず、賭博に耽り、阿片に陶醉して獨り巫山の夢を樂むのも、又た彼等の神佛に對する祈願が、一身の幸福、一家の安全以外に出でないのも、みなこの信念の現はれです。堯舜治下の理想的平和時代でも、彼等は「井を掘り水を呑み、石を枕にして眠る、帝力我に於て何かあらん」と鼻先であしらつてゐたのです。彼等の望むところは、唯だ何人にも干渉されない平靜境に、満腹して安眠することであつて、他との調和などといふことは、唯だ自家に直接影響の及ぶ範圍に於て丈けの事です。支那人は實に消極的の平和主義者なのです。

支那人の最も嫌ふものは、兵卒に徴集されて社會の落伍者扱ひにされる事と、理由手段の如何に關らず金を出す事です。殊に金を出すことは、租税公課たると、強奪たるとを問はず、最も忌み嫌ふことで、支那人は生命の方が大事か金が大事かかといつても外國人から疑問にされるのです。故に文化生活などといふ事は、理解出來ないばかりか、多少理解しても強いて望みもしないのです。それはそういふ便利な世の中になると、生活費が嵩む、又たその施設のために、餘計な税金を取られるからであります。支那に公共事業が發達せず、所謂文化施設の見るべきものが無いのは、そこにあるのです。この信念は既に潜在意識として化石してゐるものですから、一朝一夕に

熔融すべきものではありません。

支那人の理想の平和を表現したものは、老子でその道德經のうちに次の如く説いてあります。

賢人を尙べは、世間一般に自己のそれに及ばざることを耻ぢ、己れも亦尊敬されようとして競争することになる。珍奇高價な財寶をもて唯さなければ、盜賊を働く者は無い。欲しいと思ふような物を見せびらかさなければ、民心の亂るゝ事はない。世間が騒がしくなるのは、人々の欲望からのである。だから、聖人の政治は、人民に無用な智慧を與へず、欲望を刺戟せず、純朴にして置いて、民衆をして自己の力によりて衣食足らしむることである。かく人間を自然のままの境地に居らしめ、自然のままの性を遂げしむれば、天下治らずといふことない。

これ治めずして治まるの法で、實に支那人向きに天下太平の要道を説いたものであります。それにつけて考へさせられる事は、昭和十三年支那事變中、日本軍の一部隊が山西省の山奥の小部落に行つた時、一日本兵が群がる土民中の一少年に數個の水破糖を與へたところが、この少年は手に受けはしたものの一向口に入れようはしないので、兵士は手眞似で食ふことを勧めたのです。

少年は恐らくその一片を口に入れました。周囲の土民たちは、今にもこの少年が泡でも吹いて悶死しはせぬかといふような、頗る危惧の表情を以て少年の顔を見守つてゐた。やがてこの少年は歡喜の叫びを發したその刹那、數人の大人が少年の手に残つて居る數個の氷砂糖を奪ふため、大亂闘を起し負傷者まで生じたといふのです。聞けばこの地方の土民たちは、未だ曾て砂糖といふものを知らなかつたのだそうです。

この兵士の親切はさることながら、數個の氷砂糖が一部落の平和を搔亂する結果を生じたのです。不要な通り一遍の支那視察者は、支那は交通は不便、教育は不備、衣食は粗悪、衛生状態は不良で、住民は實に不幸なものである。彼等を幸福にしてやるために、早く文化施設をしてやらなければならぬと申します。これは一應尤に聞えますが、「人の生命はその有ち物の多き、よらぬなり」といふことを知らぬからの事であり、人間の幸不幸は心境の問題で、物質文化の有無などによるものではありません。現に我々日本人が外國輸入の文化に依て、果してどれだけ幸福になりましたか。却つてそれがため、長い歴史に育まれた傳統的文化を破壊されたことを後悔し、今日では舶來文化の清算に悩んでゐるではありませんか。それをも反省することなく、支那人のような化石した信念を有つ者に、押し賣的の文化施設は——しかもそれは何人の負擔に於

てなきれるのですか——むしろ有がた迷惑でせう。

「大國を治むるは、小鮮を煮るがごとし。小魚を煮るとき矢たらにいじり廻はすと壞れる。法律づくめの政治をしなければ、人民は純撲である。その政治が苛察なれば、人民は政府を怨み、常に不足の感を抱く。」（老子、道德經）

六、直譯文化の押賣

私も日露戰爭直後十數年間、滿洲に日本文化の強制移入を手傳つた苦い經驗を有つて居りますが、支那及支那人に對する不十分な認識で、押しつけた異種文化といふものは、決して根を生やすものではない。「江南の橋も江北に移せば枳となる」ことを知つて、今更に後悔致して居ります。斯の如きは、嘗に滿洲ばかりでなく、他の所謂「外地」に對する日本の今迄の施政は、みな似たり寄たりではないでせうか。

滿洲事變の原因は、日本人の滿洲の自然及先住者に對する認識不足と、日本人が日本の眞の使命（即ち祖神の御教「天地の公道」とを知らなかつたために、二十年に亘つて自身にも消化しきれない、直譯文化の押賣りをしたところにあつたのです。そこへ、明治大正といふ「歐米」

仕込みのドクトルの、誤診から投薬を誤つたため、満洲といふ病人が精神に異状を來たした結果、終に昭和日本といふ外科の名醫の、手術を煩はすに至つたといふのが、即ち満洲事變なるものです。

昭和十二年來の支那事變は、何分にも四百四病が膏盲に入つて居て、半身不隨の状態にある支那といふ大きな身體の治療ですから、明治大正式のドクトルや、昭和式外科醫の手文けでは、到底覺束ないので、どうしても全體醫學に通じた皇漢醫の、氣長い親切な治療を必要とするので、第一、脈の取り方からして、西洋流は間違つて居るではありませんか。

文化といふものは、民族性の精華で、民族それ自體のうちから生れたものでなければ、匂ひもなく又た生命もないものであります。兎角よその花は綺麗に見へるものですが、漫然それを手折つて來ては、その當座はよいがすぐ枯れるものです。それと同じく他から移入した文化は、アイチ緑門か葬式の供花のようなものです。緑門や供花は短時日のうちに、外観まことに雄大壯麗なものを現出しますが、それはせいぜい數日の生命しかありません。併し一寸その場は胡麻化せるので、西洋仕込みの文化技師（立法、行政、學術、技藝の専門家）といふ花屋さんたちは、商賣柄それ

を今又支那に押賣りしようとしてゐますが、それは支那人のために、誠に氣の毒な事であるばかりでなく、（葬式花はまだ早い）、今も尙その完成に向つて進みつゝある、明治維新の皇謨に悖るものであります。

直譯文化を押賣りして、支那人を西洋人擬ひにすることなく、支那人をして眞の支那人たらしめることが、先決問題であります。それには「一利を起すは一害を除くにしかず」で、唯だ便利一方の外國模倣文化を興へる前に、除去してやらねばならぬ幾多の害毒が支那にあることを閑却してはなりません。これが存する限り支那は勿論、東洋の平和は望めませぬ。

その害毒とは、それには支那自體のうちにも有つものと、外から蒙つて居るものとがあります。前者は支那人の自覺に俟つて、彼等自らの手で除去されなければなりませんから、今こゝに之を擧げることが差控へますが、後者即ち外から蒙つて居る害毒に就て、特に國策の指導推行の任に當る識者の注意を喚起せんとするものであります。

七、東洋平和のため

支那が外から蒙つて居る害毒のうち最も甚しいものは、共産黨とキリスト教會です。前者に就

ては世間周知のところであり、また日ならずして影を潜めませうから、今更取り上げて問題にする程のことはありませんが、後者は共産黨よりも陰險で根深く、且つ今後に残された東洋平和の痛ですから、その概要を申上げて置きます。

日本内地に於けるキリスト教の表面状態のみを見て居る人は、キリスト教會の害毒などといふことは、思ひも及ばれぬでせうが、かの大正八年朝鮮獨立運動の、無意味な騒動の裏面に、暗躍した魔の手を知つて居る者には、略ぼ想像がつくかと思ひます。支那に於けるキリスト教會の行動は、當年の朝鮮の比ではありません。昭和十三年十月二十七日のラヂオのニュース放送中、さる高貴な方の漢口御陣中の御話として、「支那奥地到る所に歐米各國宣教師が、二十年三十年と不自由な生活を忍びつゝ、胸に祖國をしつかと抱いて辛棒強く活動して居ることを、日本人は忘れてはならぬ」と仰せられたと伺ひました。

支那に於けるキリスト教會は、景教は別として、元の成宗の大徳三年（西紀一二八一年）北京に、耶蘇教會堂の建立を見たのが始めです。其後日本の島原天草の亂に鑑み、支那では雍正三年（西紀一七二五年）、國家を侵奪するものなりとして、斷然これを禁止したのでありますが、何分にも支那の事ですから、この禁令が徹底せず、剩る宣教師は支那官憲を買収して、國禁を犯して潜

入して邊疆に布教し、道光年代からその爪牙を研ぎ出して、支那に内亂外寇を誘發し。その朝廷の弱り目に乘じて、英佛兩國を表面に立て、清國との間に、布教條約を締結せしめ、他の國もこれに均霑することになりました。その條約及びその後外交案件による取極めで、歐米各國はキリスト教の布教につき、次のような重大權益を有つて居るのであります。

歐米各國人は支那内地に於て、自由に天主教及び耶蘇教の傳道布教をなすことが出来る。歐米各國人は教會堂及其の附屬施設のために、支那内地に於て土地を買收所有する事が出来る。（支那ではこれ以外は外國人の土地所有を許さぬのです）傳道布教用の歐米各國人の所有地は、大公使館の敷地同様、支那政府の一切の權力から不可侵權を有し（即ち一種の領土權です）、宣教師、傳道者たる歐米人は、外交官同様治外法權を有するから、教會堂及附屬施設の敷地建物内にては、如何なる事を計畫し又は行つても差支ない。又た天主教及耶蘇教の布教傳道に對し、支那官憲は制肘を加へ、又は支那人が信徒たることを妨害することは出来ぬ。

それからといふものは、宣教師傳道者は、支那大官同様の護衛付きで大手を振つて、支那内地

を旅行し、到る處に必要以上に廣大な土地を買収して、教會堂を建て、支那官憲の目を憚る不良分子でも何でも構はず、金錢又は物品を與へて信者にし、或は教會堂敷地内に居住せしめ、或は難民救濟事業とか學校とかの名義を以て、信者のために異窟を供給しました。こういふ信者を支那では「教民」と呼び、支那政府では歐米人に準じて取扱つて來たのです（恰かも米國で市民権を有つ東洋人のようなものです）。

支那のキリスト教信者即ち教民は殆んど全部、唯だ歐米宣教師の權勢に阿附して、何等かの利益を獲得せんとする者共でありますから、勢ひ虎の威を借る狐の如く振舞つて、到る處で支那官民との間に事件を起します。支那ではこれを「教案」（即ち教會關係の外交案件の義）と呼び、これが起ると、すぐその宣教師の所屬國の公使が飛び出して、北京政府を窘めつけて、賠償金を取つたり、謝罪さしたりしたので、支那地方官に取つては、その管内の教會堂と教民は正に鬼門でありました。帝政時代の獨逸が膠州灣一帯を、租借名義で取つたのも、實は濟南で獨逸人天主宣教師二名が、支那婦人を凌辱したため土民から打殺されたのを言ひがかりに、豫て支那に對して野心滿々たるカイゼルが、軍艦を差し向けて北京政府を脅迫して、その賠償として得たものです。

この布教條約とそれから發生する教案とにより、清朝は威信を内外に失墜し、その弱體を暴露して、こゝにその崩壞の運命に逢着したのです。そして清朝の崩壞に拍車をかけたものは、革命黨即ち教民たる廣東人浙江人でありました。

又たこの布教條約は、歐米人が口にする在支權益中最も重要なもので、假令國民黨政府が壊滅し、共產黨の勢力が驅除されても、依然として存続するものであることを忘れてはなりません。しかも、現在支那には、歐米人のキリスト教傳道團體百二十二の多きに上り、これに屬する教會堂數萬、學校だけでも小學校から大學に至るまでの各種四萬餘に達し、その他病院、孤兒院、難民救濟所等の社會事業施設に至つては、その正確な數字は殆んど知ることが出来ませぬ。教民の數は天主、耶穌兩教を合せて三百萬乃至四百萬人といはれて居ります。

これをたゞその外形だけで、日本に於けるキリスト教會及びその附屬施設と同一視することは、羊と羊の皮を被つた狼との見分けがつかぬ迂濶さと言はざるを得ませぬ。前にも述べた通り、西洋人のキリスト教なるものは、凡ての人類を死刑囚と信じ、これを騙し賺かして溫順に就刑させて、この世を肅清しその趾に、耶穌の王國を地上に建設せんとする計畫の下になされて居るものです。支那に於けるキリスト教は、共產黨よりは一足早く優越の地盤を獲得して、十字軍の陣營

を建設し得たのです。キリスト教の傳道團體といふのは、つまり歐米各國聯合の十字軍で、それが既に支那には百二十二軍團駐屯し、到る處に要塔、トーチカを構築して居るのです。砲彈や肉彈で破壊出来るベトンのトーチカは、せいぜい數人の兵士しか立て籠れませぬが、この十字軍のトーチカは一ヶ所に何千人でも何萬人でも立て籠れるのです。現に北京、南京、上海、漢口、廣東などにある何々大學とか稱するミッションスクールや、教會堂といふのがそれです。(これ等の建物の敷地は既に歐米人に割讓された各國の領地で、支那の領土ではありませんぬ) こういうのが支那全土に數萬あつて、支那人にして支那人ならぬ四百萬の非武装決死兵が、これに據つて得意のゲリラ戰術を以て、絶へず支那人を攻撃し、支那全土を燒土どころか、墓地に化してしまはうとしてゐるのです。

今や支那に於ける共產黨勢力の驅除は、却つてキリスト教會に幸ひし、生活に窮した共產分子は、轉向の口實のもとに、續々教會堂に逃げ込み、宣教師は自己の利害及勢力擴張のため、喜んでこれを迎えて居りますから、教民の數は急激に増加しつゝあるのであります。西洋の傳道團體の内規では、毎年新たに殖した信徒の數に依て、宣教師傳道者の成績を考査し、それに依て地位を昇降したり、その教會堂に對する支給金を増減すること、生命保險の勧誘と全然同様ですか

ら(しかも、その布教資金が、如何なる條件付きで何處から出てゐるかは知る人ぞ知る) 彼等相互の間に信徒獲得の競争が頗る劇甚で、勢ひ何でも御座れで引込んで信徒にしてしまふ、その内幕は實に淺ましいものです。

然るに西洋キリスト教會の内幕を知らぬ日本人は、偶ま何某神父などといふ在支宣教師の人的行爲(實は彼等の欺濫手段)に眩惑して、唯だく感激し、やんやと持て囃して居ります。又た既に述べた通り、西洋キリスト教の人生觀と、共產主義とは一皮むけば、誰が鳥の雌雄を知らんやですから(民主主義國で共產主義の存在が容認され、英佛米でユダヤ人が優越の地位を占めてゐるのも、またそこにあるのです)、支那の共產黨は表面的には没落しても、某々の傳道團體に屬する此等桃色教民を通じて、活動する可能性が充分あります。これ共匪を化し、教匪たらしめ、前門狼を防ぎ、後門虎を進むるものであります。

西洋キリスト教會が支那に存在する限り、東洋の平和は確保されませぬ。

私共の子弟は「東洋平和のためならば、何の命が惜しからう……」と聲高らかに唱つて出征し、朔北に江南に花と散つて、今靖國の神靈として神鎮まりに鎮つて居るのであります。嗚和我等何

の顔あつて、この神靈に謁えんや。

八、萬人の幸福

全世界の人類が希望する眞の平和は、英語の「ピース」のような死の沈黙を意味するものでもなく。又たユダヤ人が目論見んでゐるような、餓食兒童に青酸加里入りのロシヤパンを喰はせて、自分丈けが世界を獨占しようとするでもなく、さりとしてキリスト教のように、浮世の苦勞のために眠れぬ者に睡眠劑を飲ませて、天國からのお迎ひを待たせることでもありません。

驕らず、僻がまず、怒らず、泣かずに、明日の事を思ふことなく、各々その天業地務にいそしみ「永遠の今」を、あな面白、あな樂しと論ひ侵さず、奪はず、充たす、乏しからざる状態、そこに眞の幸福があるのです。萬人が均しくこの眞の幸福感に浸るところに、眞の平和があるのです。

日本古典を通じて、祖神が教へたまふ人間生活は即ちそれで、天の岩戸開きといひ、天孫降臨といふは、人間界にこの眞の平和顯現の道筋を示したまふたものです。然るに、支那から利己主義が侵入してから、物即ち鬼の跳梁によつて、この平和は擾亂され。更に西洋から權利思想とい

ふ金棒を輸入して、鬼に金棒で、人生は修羅場と化してしまつたのです。

現在の社會通念では、金を充分に貯へ、土地でも建物でも骨董でも、何でも「物」を澤山に所有し、刑務所のような高い塀を廻らした、立派な普請の家に、大勢の召使に取まかれて、自家用車で出入するような者を、幸福だとしてゐます。ところが、こういう家には、金ゆえに物ゆえに、絶えず物議が起り。その主人は胃腸樂を手離したことがなく、何を食つても一向うまよとはいはず。又その物を他人が奪はないか、盗まないかといふ心遣ひが絶へずあつて、常人の生活費の三倍もかかるような猛犬を飼つたり、尙その上に請願巡査まで置いてゐます。つまり私費で檻獄を造つて、自らそのうちに收容されてゐるのです。

こういう風に、生の喜びよりも死の恐怖の方が強い處に、幸福があるでせうか。然るに明治以後の學校教育も、社會の趣向も、みな金と物とにばかり向けられて、やれ科學だ、文化だ、産業立國だと狂奔して來ました。これが内昂して結局何々主義などといふ社會的精神病を誘發したのです。これ全く明治大正の政治家、教育家、社會指導者の連帶責任です。

私の住んでゐる近所に、附近の人々が〇〇の原と呼ぶ、三千坪ばかりの屋敷跡の大空地があり

ます。そこには小山があり大小の庭木が生え繁り、芝生もあつて、正に小公園です。それを十年前から近所の子供達ばかりでなく、町の盆踊りや出征兵士の壯行會などに利用して來たのであります。ところが三年前にその所有者の××保全社といふのが、周圍に鐵條網を張り廻らし、立入禁止の制札を建て、隣地の質屋に管理させることになりました。併しそれまで利用してゐた附近の者たちは忽ちその鐵條網を破り棄て、依然として利用して居りましたところ、或日自家用自動車で乗つて來た保全社の社員が、そこに遊んでゐた子供達を小酷く叱責したので、その親たちが飛出して、この社員との間に喧嘩になり、終に警察官まで馳せつけて來ました。若い巡査は、保全社は所有者であるから、その社員に子供たちを追ひ拂ふ權利ありとして、その社員と喧嘩した子供の親たちを引致したので、町内の大問題となりました。然るに、その事件があつてから間もなく、東京地方を襲つた風速三十米の颶風は、この空地の樹木の大半を吹き折り、柵を倒し鐵條網を寸断してしまいました。

聞けば、この〇〇原なるものは、現在の所有者××保全社が十數年前に、擔保流れとして當時の時價の半額にも足らぬ金で、前の所有者から取つたものだそうで、今日では十倍以上の價格を生じてゐるのですが、この××保全社ではまだまだ地價の昂騰を見込んで、賣りもしなければ、

貸しもしないのだといふ事です。この保全社長といふのは、先代が維新直後田舎から徒手空拳で東京に出て來て、勤儉力行小金をためて金貸しをしたり、相場をやつたりして、巨富を蓄積し、東京市内に豪壯な本邸の外數軒の控邸、數十ヶ所の地所貸家を所有し、鎌倉、輕井澤、熱海などに別荘を有つてそうして死んだ、あとを相続した二代目だといふ事です。(これ正に、立身出生、勤儉貯蓄、權利義務の恪守といふ學校の修身教育の好模範です)

これに類したものは、東京中にも幾十とあり、日本全國には到る處に存在し、世間も敢て不思議としない常態であるのに、何故私がかゝる有り振れた事を、今更らしく述べ立てるかとの疑問が起るでせう。これを有り振れた事として、觀過せんとする社會通念に對し私は「眞の平和」のために反省を要求せんとするものであります。

試に眼を開いて世界を自渡しますと、英、米、佛、蘭、蘇聯等の西洋の有てる國の態度は、正にこの××保全會社そのまゝではありませぬか。今日太陽の沒することのないといふ英國の領土は、どういふ手段で獲得されましたか、そして加奈太、濠洲の如き廣漠たる空地には、近接民族の立入りを禁止して居ります。米國は四五十年前、ロシアからアラスカを二千萬弗で、西班牙か

らフィリッピンを同じく二千萬弗で買取つて、アラスカからは既に數十億弗の砂金を收得し、フィリッピンからは今迄には別に大した利益は擧げて居りませぬが、東洋發展の足溜りとして、將來にその値上りを期待して、頻りにその防備を強化して居ります、正しく××保全社の鐵條網と同じです。ロシアの西比利亞から内外蒙古にかけの領土は、侵入強奪に依て獲たものであることは、ロシア自身も承認してゐるところです。そこでその隣に、子澤山の貧乏世帯を張つて、子供の遊び場も有たぬ日本は、歐洲大戰中西洋の手傳ひをしてゐるのだから、この位のこととは差支へなからうと獨り合點して、殆んど無人のシベリアの原に立入つたところが、獐猛なバルチザンといふ番犬に噛みつかれ、おまけにその物音を聞きつけて、國際警察官を以て任ずる、アメリカといふ青二才が飛出して来て、日本はこの原へ立入る權利はないといふので、日本は大枚四億圓の金をそこへ落したまゝ、すどすどと引きさがつたのです。

如何に貧乏人の言ひ分の通らぬ世界とはいへ、こゝにいふ周圍の情勢に對しておとなしく黙つて引んで居られますか。歐米列國といふ大地主たちは、××保全社同様自分たちの權益ばかり主張して、近所隣りの貧乏人のことなどは振り向きもせず。全人類の救ひ主を擔ぎ廻る西洋の坊主共は、どうせこの世の終りは近いのだから、神妙に死の沈黙を守れといふのです。併し黙つて引込

んで居ては、子供等は道路で遊んで怪我をするか、發育不良になつてしまうのです。それでも神の御旨でせうか。然らばどうしたらよいでせうか。

こゝに實に暗示に富んだ實話があります。それは矢張り東京市中での出來事ですが、前に述べた××保全社所有の○○の原と同様な大空地が他にあつて、その地主も××保全社同様法律上の權利を楯に、附近の貧乏人の子供たちの立入りを禁止したところが、其處の管轄警察署長がそれを聞きつけて、自ら地主の處に向いて、次のような話をして、終に地主を承諾させて、その空地を附近の小運動場として開放させて、住民一同から非常に徳とされて居るといふ事です。

所有者はその所有地を、他人が勝手に使用することを禁止することは、法律上當然の權利であつて、何人もこれに對して異議を挿むことは出來ないが、元來各人の所有地なるものは國土の一部分で、この國土一切は 陛下の御領土である。それを 陛下の御許しによつて、使用収益處分することを得るのであるから、その御鴻恩を感謝すると同時に、所有者たる以上は完全にこれを使用し、収益しなければならぬ。それをせず、陛下の御領土を唯だ空地にして遊ばせて置くのは、この恩典を蔑にするものではないか。然かもその周圍にはやがて 陛下の御

用に立つべき 陛下の赤子が、遊ぶに庭もなきため、その身體の發育保健上誠に憂慮すべき状態に在るのを見殺しにしては相濟むまい。これは正に土地以上の問題ではないか。幸ひ、所有者が使用収益に役立てない、即ち恩典を蔑にしてゐる土地があるならば、それを使用して呉れる人は、所有者の及ぼさるところを、代つてやつて下さるのであるから、寧ろ地主の方から御願しても、使つて頂くべきではなからうか。

萬人の幸福のため、今日世界が要求するものは、この署長のような權威と熱情です。

九、兇國を縛る捕縄

差當り使用の目的もなく、収益せんにも手も力も及ばぬような、廣大な土地を唯だ繩張り丈けして居る、保全社のような世界の大地主國は、他國の子供たちが侵入しはせぬかと、徒らに不安を感じて、夜もをちく／＼眠れず、鐵製のブルドッグのような軍艦などに見廻りさしてゐます。それでも尙安心出來ぬところから、歐洲大戰前は和蘭のヘーグに、大戰後は瑞西のジュネーブに、澤山の子供を抱へた貧乏國連を呼びつけて、境界線の鐵條網を破つたり、無斷で垣根を越へたり

するのは罪惡である。そういふ者は皆で寄つてたかつて、袋叩きにするぞと脅かしたり。又た物持ち貧乏は運命だから、諦めてたゞ死の沈黙を守れ。そしたら後の世には永遠の幸福を授かるぞと、嫌かしたり嚇したりしましたが、そんなものが何の效能がありません。

この種の平和會議とか、國際聯盟などといふものは、満腹した獅子や熊と、空腹な狐狼の寄合ひですから、何日まで経つても一致すべき筈はありません。それに第一、個々の物が集つて一體になるといふ、根本の考へが間違つて居るのです。これは屢々引合ひに出すように、部分が集つて全體を成すといふユウクリッドの公理から出發した、西洋流の迷信の結果で、一體となつた以上は最早個々の存在はない筈です。それを矢張り個體に執着するから、一體になれないのです。これが充分に納得出來なければ、眞に世界一體は望めませぬ。

そこで、萬人の幸福のため、世界の不安を除くには、前に御紹介した警察署長を煩はして、有象無象を片端から引括つて、豚箱にでも押し込んで、強硬説論をして貰ふ外はありません。が、それとしても何で縛つて貰ふか、まさか國際法とか國際制裁規約でもありません。人間が作つたそんなものは、新聞紙の紙捻程の力もありませぬ。幸ひ日本には鋼鐵の鎖よりも強い、國を縛る神の綱があります。それは「ムスビ」と申すのです。

「ムスビ」とは言靈で、その「ム」はムスメのムで、母胎で、萌のみありて未だ現はれざるの意。「ス」は溜、擦のステ、壊はす活きの意。「ビ」は靈で。「ムス」と二音合成して、蒸發産出の義であります。蒸發とは液體といふ成態を破つて華昇して、動態となることであり。産出とは閉ぢ込められた母胎から脱出して活動することであります。「ムスビ」とは修理固成といふに同じく、絶へず流轉する靈的活動の義即ち創造精神であります。古典はこれに「産靈」又は「魂」の字を充て居ります。(魂をムスビと訓ましたのは、○なる靈が結びたるものが魂で、意味の世界から存在の世界へと出動流轉するの義であります)

この「ム」の神徳が高皇産靈(タカミムスヒ) (高魂とも書く)、亦の御名を伊邪那岐命、神漏伎命とも申し。「ス」の神徳が神皇産靈(カムミムスヒ) (神魂とも書く)、亦の御名を伊邪那美命、神漏彌命と稱へまつるのであります。この「ム」なる「ナギ」(薙、風、和)の神徳と、「ス」なる「ナミ」(無、波)の神徳とが、ムスと抱合して、萌しのみありて未だ發現地せざる殻を破つて、はじめて生成發展の活動が展開し、そこに「クニ」は生れるのであります。この「ムス」の活動は左旋右旋で、二つ巴の如く纏れつ紕れつ、絶へず動くのです。之を日本書紀には國生みの神事として、次の如く述べて居ります。

「故レ二神(伊邪那岐、伊邪耶美)改メテ復タ柱ヲ巡リタマフ。陽神ハ左ヨリシ、陰神ハ右ヨリシテ、既ニ遇ヒタマヒヌル時ニ、陽神先ヅ唱ヘテ曰ク、妍哉可愛少女ヲ。陰神後ニ和ヘテ曰ハク、妍哉可愛少男ヲ。然シテ後ニ官ヲ同フシテ共ニ住ヒテ兒ヲ生ム。大日本豊秋津洲ト號ク。」

最近の物質科學に於ては、有生物は勿論無生物でも、物といふ物は、みな絶へず運動して居る。そして物質の窮局を電子と呼び、この電子に陰電子と陽電子とがある。物とはこの陰陽の兩電子が左り廻り右廻りしつゝ、抱合することに依て人間の意識に上ることである。と申して居ります。

何千年も前に、私共の祖先が既に直觀し得たことを、たゞ感覺丈けをたよりにして組立てる科學は、今頃やつと臆氣ながら判りかけて來たのであります。

これに依ても略ぼ諒解されるように、直觀即ち意味の世界に於ても、物質即ち存在の世界に於ても「平」といふような、停滞固着といふことはあり得るものではない、唯だ殻を破つて發動する「禾」即ち「和」あるのみで、これが宇宙の眞理即ち天地の公道であります。

明治天皇は維新の劈頭に、「舊來の陋習を破り天地の公道に本づくべし」と、天地神明に誓は

せられたのであります。舊來の陋習とは唯存在の世界なる「個」の意識に定着固執すること、これを打破即ち修理して、天地即ち「全」の意識へと、絶へず「ムス」べきことを仰せられたものと拜察致します。これが祖神の御教で、天壤無窮の宏謨（無限の發展）とはこれで「維新」又は「御一新」といふも亦この義であります。（維新とは支那の詩經の大雅文王篇に「文王下ニ在リテ天ニ昭ナリ、周ハ舊邦ト雖モ其ノ命維レ新ナリ」とあり、又書經の胤征に「威ナ與ニ維レ新ナリ」とあるに據つたもので、御一新とは「日ニ新ニ又新ナリ」の意で、一時たりとも停滯せず進み行くの義であります。尤も今日の支那人が俗語として用ゐる「維新的」といふのは「ハイカラ」といふ意味です）

「ナギ」「ナミ」の神徳が「ムスビ」の神事によりて、「クニ」を生みたまふたとき、「吾が生めるクニはただ朝霞のみありて薫り満てるかも」と仰せられたのは「クニ」とは人間の感官に上るような、限界のある地なる國土ではなく、感覺を超越した「全」即ち宇宙の義であることが察せられるでありませぬか。そして祖神は、この「クニ」は天津日嗣のしろしめすべきところであると、言よさしたまふたことに依て「全」なる宇宙は、日本天皇の統治したまふところであることがわかります。敢て東洋といはず、地球の全面から舊來の陋習なる、一身一家一國とい

ふが如き個人主義の殻が推き破られて、全體意識に歸服したとき、世界を擧げて日本天皇に歸服し奉つたときが、即ち萬人待望の世界平和の日であります。

一〇、明治維新の完成へ

日本天皇が全世界を完全に統治したまふ日が、則ち世界平和の日であると申すと、今迄の學問や社會通念に拘はれて、存在の世界しか意識し得ない人達は、それは日本民族の世界侵略を意味する狂氣の沙汰だと早合點するでせう。

私のこふのは、そんな物質的な、偏狭な意味ではありません。これは祖神垂示の大道で、そうあることが天地の公道でありますから、神隨の境に入つて頂くと、すぐわかるのでありますが、説き明かすとなると、中々困難ですから、次の事實で御會得を願ひます。

徳川幕府時代には、この狭い舊日本國に、三百諸侯即ち三百内外の國家がありました。今日から考へると、お可笑なものです。が、「國家」といふ本來の字義は、この程度のもです。現に歐羅巴の眞中にも、加賀藩や薩摩藩よりも小さな國家が嚴存してゐるではありませんか。この三百

内外の國家が、大小それ／＼不完全ながらも國家生活を營んで來たのです。沖縄縣などは琉球王國として存在してゐました。これ等の國家を統制してゐたのが徳川幕府で、その幕府の首腦者たる徳川家自身も亦直轄の土地人民を領有してゐた一國家だつたのです。丁度歐洲大戰前の獨逸帝國（實はゲルマン民族國家の聯合體で、そのうちの一國家たるプロイゼンがこの聯合體を統制しこれを代表してゐたまでの事です）のような有様でした。そして長多も四海の主にまします天皇は、京都の皇居に坐しまして、その祖神に承けたまひ統治の大權は、徳川將軍に御委任の姿で、祖神の宏謨に忝るところがあるので、祖神は「直日の人」を天降したまふて、宏謨を翼賛しまつらしめたまふて、爰に明治維新の天業が發現したのであります。

この明治維新の天業を仰ぎまつたとき、徳川家直屬の人々を始め、三百の小國家に分屬してゐた人々は、彼等が傳統的に意識し來つた國家が解體されて、無力な公卿に圍繞されて、京都に坐します天皇の朝廷に直屬するといふことは、どうしても理解出来なかつたのです。今日からは想像するだに。誠に長多い次第ですが、徳川幕府の朝廷に對する政策がそうさして來たのです。この無理解が鳥羽伏見の戦を始めとし、關東、東北各地に討伐戦の必要を生じたのです。そして百年の間日本人の魂のうちに喰ひ入つて、この無理解を生んだ佛教と儒教とを驅除し（明治新政の

手始めは廢佛棄釋、即ち佛教を廢し孔子を祭ることをやめることでした。支配階級の手から兎器を取り上げ（廢刀令）、各小國家の軍備を撤廢して、それを朝廷に收められ、人民の間に存する職業別による階級を廢止し、日本人が從來意識してゐた國家を解體して、天皇の直接統治の下に立つことになりました。この明治維新の結果、ほんの一部の世襲官吏たる武士階級だけは、その當座は生活難に遭遇して困りもしましたが、日本人の九〇パーセントは、各小國家の隸屬してゐた時代の所有權を奪はれるでもなく、却つて凡ての束縛から解放されて、千數百年來彼等の先祖が想像だもし得なかつた幸福な状態、即ち平和を享樂することが出來たではありませんか。

今日の日本人、即ち明治維新の有がた味を直接經驗した人から二代目三代目の人は、大正昭和の日本を以て別に不思議とも思はぬでせうが、明治維新を迎へた當時の日本人には、その意識し來つた國家は解體しても、天皇の直接御統治の下に立つときは、萬人均しく幸福であり眞に平和であることをしみじみ感得したのであります。これこそ世界全人類に對する活きた教訓ではありませんか。

今日の世界は丁度徳川幕府時代の舊日本國內と同様です。正に幕末時代です。然るに、不幸に

して明治六年を以て、維新の天業が脇道にそれて、物質的には進歩發達したようですが、日本人の魂は習性に囚はれて、又た舊來の陋習に逆戻りしたのです。即ち三百諸侯の小國家のうちに於ける生活から、單に世界に八十幾つかある、その國家群中の一國家としての國民生活へと移つて了りました。やどかり蟹が蠃螺の殻から法螺貝の殻に移つたまです。これは八紘一字の大精神でもなく又明治維新の眞の御主旨でもないことは、次の御誓文と御震翰を拜誦すれば、直ちに納得されることです。

明治維新の眞の御主旨は、嘗に舊日本國內に分立してゐた小國家を解體することばかりではなく、全世界に對立してゐる一切の國家（人間同志が約束して造つて居る團體）を解體さして、現^ア身神^{ツミカミ}が天下を統べ給ふ義で、舊日本國內の小國家の解體は、單にその手始めに過ぎなかつたのですから、それ丈で満足して居ることは、明治維新の天業の完成とは申せませぬ。

世界の全人類が、見本として示された舊日本内の小國家のように、各自の國家を解體して、人間の魂のうちに寄生して居る妖魔（即ち個人主義、民主主義、唯物觀）を驅除して、現身神の直接御統治の下に立つときが、世界平和の日で、これに向つて不斷の邁進をつゞけることが、即ち「ムスビ」の神徳であります。やどかり蟹をして法螺貝の殻を破つて、龍と化して天翔らしむる

ものが、この「ムスビ」であります。

一一、世界平和の神命

明治元年三月十四日 明治天皇は紫宸殿に出御あらせられ、有司百官を率ゐて、親しく天神地祇を祭らせたまふて、次の五事を神明に御誓ひ遊ばされました。世に所謂「五箇條の御誓文」として有名なものであります。

- 一 廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ
- 一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ
- 一 官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメン事ヲ要ス
- 一 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ
- 一 知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ

我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ 朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

これと同時に、萬民に對し御宸翰を下し給ふたのであります。そのうちに次のように御せられてあります。

今般 朝政一新ノ時ニ膺リ天下億兆一人モ其處ヲ得サル時ハ皆 朕カ罪ナレハ今日ノ事 朕自身骨ヲ勞シ心志ヲ苦メ艱難ノ先ニ立古 列祖ノ盡サセ給ヒシ蹤ヲ履ミ治蹟ヲ勤メテコソ始テ天職ヲ奉シテ億兆ノ君タル所ニ背カサルヘシ

往昔 列祖萬機ヲ親ラシ不臣ノモノアレハ自ラ將トシア之ヲ征シ玉ヒ 朝廷ノ政總テ簡易ニシテ如此尊重ナラサルユヘ君臣相親シミテ上下相愛シ德澤天下ニ洽ク國威海外ニ耀キシナリ然ルニ近來宇内大ニ開ケ各國四方ニ相雄飛スルノ時ニ當リ獨我邦ノミ世界ノ形勢ニ疎ク舊習ヲ固守シ一新ノ效ヲ計ラス 朕徒ラニ九重中ニ安居シ一日ノ安ヲ偷ミ百年ノ憂ヲ忘ルルトキバ遂ニ各國ノ凌侮ヲ受ケ上ハ 列祖ヲ辱シメ奉リ下ハ億兆ヲ苦シメン事ヲ恐ル

故ニ 朕茲ニ百官諸侯ト廣ク相誓ヒ 列祖ノ御偉業ヲ繼述シ一身ノ艱難辛苦ヲ問ス親ラ四方ヲ經營シ汝億兆ヲ安撫シ遂ニハ萬里ノ波濤ヲ拓開シ國威ヲ四方ニ宣布シ天下ヲ富岳ノ安キニ置ン事ヲ欲ス

これは申すも畏き事ながら、遠くは神武天皇の八紘の一字の大詔、更に遡つては皇祖天神の天壤無窮の神勅と同じ御趣旨で、常に日本國民のみならず、天下億兆即ち世界の全人類をして、みなその處を得せしめたまはんと、大御心と拜察し奉るのであります。

日本臣民とは、即ちこの 聖旨を奉載して皇謨の翼賛に粉骨邁進する御親兵の義に外ならぬのであります。

ものふの臣のをのこは大きみのまけのまにきくといふものぞ（萬葉集）

皇神の靈手觸れやしつらむ吾が胸に魂の小琴の高鳴ぞする

隆光

昭和十五年三月五日印刷
昭和十五年三月八日發行



(定價金一圓五十錢)

著者 大河平隆光

東京市芝區田村町二ノ一三

發行者 田中喜重郎

東京市牛込區山吹町一九八

印刷者 萩原芳雄

東京市芝區田村町二ノ一三

發行所 大日本法令株式會社

振替東京三五二三七番

目 書 行 刊

佐藤清勝著	同	櫻澤如一著	同	同	品川義介著	天野良和編	(佛)クラプイヨ社版
大日本政治思想史(上下)	道 の 哲 學	人間の營養學及醫學	米の知識とたき方たへ方	砂糖の害と肉食の害	人を生す道	謹御歴代聖勅輯覽	新世界大戰外史(六卷)
價各三・五〇 送各二・二〇	送價二・〇〇 一・四〇	送價一・六〇 一・四〇	送價〇・八〇 〇・九〇	送價〇・六〇 〇・六〇	送價一・三〇 〇・九〇	送價四・八〇 二・二〇	未定

398
56



